

村上 春樹
『風の歌を聴け』

分身の輪舞 (1)

鈴木 忠 士

I はじめに

II 女の子たちの輪

- (1) 初めてデートした女の子
- (2) 最初の女の子
- (3) リクエスト曲をプレゼントした女の子
- (4) ヒッピーの女の子
- (5) 仏文科の女の子 …… (この項まで本号)
- (6) 小指のない女の子
- (7) 手紙の彼女

I はじめに

『風の歌を聴け』(1979年)¹⁾には、音楽家の名や曲の題名がたくさん出てくる。以下にそのすべてを、物語の中に現われる順に挙げてみる。

ジョニー・アリデイ、アダモ、ミシェル・ポルナレフ⁽³⁸⁾²⁾、ブルック・ベントン「雨のジョージア」^(42, 43)、クリーデンス・クリア・ウオーター「フル・ストップ・ザ・レイン」⁽⁴³⁾、ビーチ・ボーイズ^(46, 46, 50, 119)、「カリフォル

ニア・ガールズ」(46, 46, 48, 50, 55, 119), ベートーベン「ピアノ・コンチェルトの3番」(51, 54), グレン・ゲールド(51, 54), バックハウス, マイルス・デイビス「ギャル・イン・キャリコ」(51), ハーパース・ビザール(52), レナード・バーンステイン(54), ボブ・ディラン「ナッシュヴィル・スカイライン」(57), マービン・ゲイ(72), 「エブリデイ・ピープル」, 「ウッド・ストック」, 「スピリット・イン・ザ・スカイ」, 「ヘイ・ゼア・ロンリー・ガール」(76), ピーター・ポール&マリー(87), エルヴィス・プレスリー(74, 114), 「グッド・ラック・チャーム」(114)

見てのとおり, 出現頻度で際立っているのが, ビーチ・ボーイズと, そのナンバー「カリフォルニア・ガールズ」である。

それ以外には, エルヴィス・プレスリーと, そのヒット・ナンバーの一つ「グッド・ラック・チャーム」, そしてベートーベンの「ピアノ・コンチェルトの3番」が目をひく程度である。

ビーチ・ボーイズは1961年にデビューしたアメリカのロック・バンドで, 60年代の一時期, ビートルズと人気を競ったと言われている。その数多くのヒット曲のうち, 「カリフォルニア・ガールズ」(1965年)の名だけがくり返し出てくる。しかも, その歌詞の1番全体が紹介されているうえ(48-49), リフレインの部分が再度引かれてもいる(119)。そうしてみると, この曲が『風の歌を聴け』の中で占めている位置は特別なもので, 「主題歌」(74)ともいうべき役割を果しているのではないかと推測される。

引用されている「カリフォルニア・ガールズ」の1番の歌詞は次のようだ。

「イースト・コーストの娘はイカしてる。

ファッションだって御機嫌さ。

サウス
南部の女の子の歩き方, シャベリ方,

うん, ノックダウンだね。

ミドル・ウエスト

中西部のやさしい田舎娘、

ハートにグッとときちゃうのさ。

ノース

北部のかわいい女の子、

君をうっとり暖めてくれる。

素敵な女の子がみんな、

カリフォルニア・ガールならね……。 (48-49)³⁾

最後の二行のリフレーンは、その前の歌詞との間に切れ目、飛躍があつて、文意にあいまいさが残るが、ごく普通に読めば、この歌詞には、様々な土地が産み出す様々なタイプの「素敵な女の子」たちのすべてが「カリフォルニア・ガール」になってくれたら、そうすればカリフォルニアですべてのタイプの「素敵な女の子」たちを愛することができるのに、という「^{男の子たち}ボーイズ」の願望が唄われているととれるだろう。

これは言いかえれば、すべてのタイプの「素敵な女の子」たちは、「カリフォルニア・ガール」という「素敵な女の子」の典型に包摂されうるということでもある。そして、そのような歌詞をもつ「カリフォルニア・ガールズ」が「主題歌」にも似た役割を果しているとするなら、『風の歌を聴け』の中で「僕」の前に入れかわり立ちかわり現われてくる様々な「素敵な女の子」たちも、ある元型的な「女の子」の多様な化身にすぎないと見ることもできるのではないか。

「カリフォルニア・ガール」という一般的な名の下に包摂されうる「素敵な女の子」たちは、固有の名をもたず、色合いを異にするだけの無名の存在である。ちょうどそのように、『風の歌を聴け』で「僕」とかかわりをもつ「女の子」たちも、名前の知られぬまま現われては消えていく。

「リクエスト曲をプレゼントした女の子」⁽⁴⁶⁾の「名前」を、「僕」は「やっと思い出した」⁽⁴⁷⁾、「彼女の名前を告げた」⁽⁵⁵⁾と言いながら、明らかにする

ことはないし、「小指のない女の子」(50)の「名前」は「思い出してみようとしたが無駄だった。第一に女の名前を僕が知っていたのかどうかさえ思い出せない。」(27)

この作品に現われる女性の登場人物たちのうち名前らしい名前をもつのは、「ミッチャン」(42)ただひとりである。彼女は「ラジオ N.E.B」(41)の「アナウンサー」(46)に、一度だけ呼びかけられ話しかけられて、間接的にその存在が知られる点景的人物にすぎず、「僕」とはなんのかかわりももたない。

とすれば、「僕の話」(117)に出てくる女性の主要な登場人物たちが名前の不明なままに終始するのは、語り手である「僕」がそのように望んだからだということになる。「僕」にとって、「僕」とかかわりをもった「女の子」たちの本質は、その無名性にあるということなのだ。彼女たちは、ある元型的な、それゆえにそれ自身も名前をもたない「素敵な女の子」の、姿を変え形を変えて現われる分身にすぎない、そのように「僕」は暗に主張しているのである。

それは、「僕の話」の「後日談」(117)のうちにも読みとることができる。「1970年の8月」の「話」(12)を、それから「8年」(7)後、つまり1978年に、「29歳」(117)になった「僕」が締めくくるにあたって、「僕」は「左手の指が4本しかない女の子」(118)と、「カリフォルニア・ガールズ」の「レコード」と、「仏文科の女の子」(119)について語る。そして、「ビーチ・ボーイズは久し振りに新しいLPを出した」と言いながら、「素敵な女の子たちがみんな、／カリフォルニア・ガールならね……」(119)という「カリフォルニア・ガールズ」のリフレインをくり返して、「僕」は「後日談」を終えるのである。

ここで言われている「ビーチ・ボーイズ」の「新しいLP」にあたるものは、1978年9月に発売された「M.I.U. アルバム」以外にないが、その中に「カリフォルニア・ガールズ」は収録されていない⁴⁾。

「僕」は「ビーチ・ボーイズ」の「新しいLP」を口実として、あえて「カリフォルニア・ガールズ」のリフレインを引いたのである。一方での、「左手

の指が4本しかない女の子」, 「カリフォルニア・ガールズ」の「レコード」を「貸してくれた女の子」⁽⁵⁴⁾, 「仏文科の女の子」などと, 他方で, 「カリフォルニア・ガールズ」の中で唄われている「素敵な女の子」たち, およびそれらの元型とも言うべき「カリフォルニア・ガール」とを, パラレルに置こうとする「僕」の意図, あるいは無自覚の願望は明らかであろう。

『風の歌を聴け』という物語の重要な構成要素として分身のテーマがあることは, ただ一度言及されることで, 間接的にその存在が知られるにすぎない二人の点景的登場人物によっても推察される。一人は, 「小指のない女の子」の「双子の妹」⁽⁶³⁾であり, いま一人は「僕」と「全部」, 「本当によく似ている」という, 「僕」の「兄」⁽⁸⁰⁾である。いずれも遠く離れたところにおいて, 一方は「三万光年くらい遠く」⁽⁶³⁾にいるし, 他方は「理由も言わずにアメリカに行ってしまった」⁽⁸⁰⁾ これらの「姉妹」⁽⁶⁴⁾と「兄弟」⁽⁸⁰⁾の二つの関係が, パラレルに置かれていることも明らかであろう。

ということは, 「ロールシャハ・テスト」の「図柄」⁽¹³⁾にも似た, 男たちの分身関係についても語りうるということである。だが, それは別の機会にゆずるとして, 本稿では「女の子」たちの織りなす分身の輪にしぼって考察していこう。

II 女の子たちの輪

(1) 初めてデートした女の子

「僕」が「初めてデートした女の子のこと」は, 第22章の末尾に埋草のようにして置かれた, わずか十行からなる断章で語られているだけである。

「帰り道, 僕は車の中で突然, 初めてデートした女の子のことを思い出し

た。七年前の話だ。

僕はデートしている間、始めから終わりまで、「ねえ、退屈じゃない？」と訊ね続けていたような気がする。

僕たちはエルヴィス・プレスリーの主演映画を観た。主題歌はこんな唄だった。

「僕は彼女と喧嘩した。

だから彼女に手紙を書いた。

ごめんね、僕が悪かった、つてさ。

でも手紙は返ってきた。

宛先不明，受取人不明」

時は、余りにも早く流れる。」(73-74)

「七年前」とは、「1970年の8月」(12)から数えてなので、1963年のことになる。そのとき「僕たち」が「観た」という「エルヴィス・プレスリーの主演映画」とは、「主題歌」からみて、1962年に制作されたアメリカ映画『ガール！ガール！ガール！』のことである⁵⁾。この映画の日本公開は1963年4月であった⁶⁾。

「1963年」(78)という年は、この作品の中で一つのキー・ポイントをなしている。

それはまず、「ケネディー大統領の死んだ年」(9)、「ケネディー大統領が頭を撃ち抜かれた年」(78)である。「ケネディー」(9, 23, 36, 78, 91)の名はこの短い物語の中に5度現われていて、それだけでもその名に託された象徴的意義の重さが察せられよう。

「ジョン・F・ケネディー」(23, 36)は、1961年に44歳の若さで第35代アメリカ大統領となるが、1963年11月に暗殺された。60年代の前半に青春を迎え

た者たちにとっては、一つの偶像であり、神話的存在でありえた。それは、主要な登場人物のひとりである「鼠」がケネディーの「言葉」(23)を引用したり、「ケネディー・コインのペンダント」を「胸に吊し」(91)ていることにもよく表われている。

それは若さと叡智とをあわせもつ一つの象徴的存在なのだが、同時に「コイン」の表裏のこととして、暴力・「死」があることを象徴している。

この「ケネディー大統領の死んだ年」である1963年に、「僕」は「ものさしを片手に恐る恐るまわりを眺め始めた」という。「ものさし」は、その前の行に引用されている「ハートフィールド」の言葉、「必要なものは感性ではなく、ものさしだ〔傍点は原著〕」を受けている。「僕」がこのハートフィールドの「本」と出会ったのは、「中学三年生の夏休み」(9)のことであった⁷⁾。

「僕」は「1970年の8月」に「21」(47)歳で、「大学に入った年」は、その「3年前の春」(15)というから、1967年になる。そこから逆算すると、1963年の「夏休み」には「僕」は確かに「中学三年生」で、14歳であったことになる。

「小さい頃」、「ひどく無口な少年だった」(23)「僕」が、「まるで堰を切ったように」、「突然しゃべり始めた」のも「14歳になった春」(26)のことであった。

つまり、「1963年」、「14歳」のとき、「僕」は自分の「まわり」にある世界との、「言葉」(25)を介しての「伝達」(24)を始めるとともに、青春のとぼ口に立ったのだ。そして、その明けそめた青春には、同時に「死」の影がさしてもいたということなのである。

ケネディー大統領暗殺の年は、もう一つの青春とも結びついている。

「若くし死んだ女〔傍点は鈴木、以下断りなき場合は同じ〕」である、「僕が寝た三番目の女の子」について、「僕」は次のように「語る」(77)。

「僕は彼女の写真を一枚だけ持っている。裏に日付けがメモしてあり、そ

れは1963年8月となっている。ケネディー大統領が頭を撃ち抜かれた年だ。[……] 髪はジーン・セバーグ風に短かく刈り込み（どちらかというとその髪型は僕にアウシュヴィッツを連想させたのだが）、[……]

[……]

彼女は14歳で、それが彼女の21年の人生の中で一番美しい瞬間だった。そしてそれは突然に消え去ってしまった、としか僕には思えない。」(78)

「1963年8月」という「日付け」から直ちにケネディー大統領が頭を撃ち抜かれた年」が「連想」されていることに注意しよう。それほど「僕」にとっては、「1963年」という年はケネディーの死と別ち難いのである。

「突然に消え去ってしまった」という「それ」は、「14歳」の「一番美しい瞬間」のことだが、「彼女」の「突然」の死を念頭におけば、「21年の人生」ともとれる。そして、そのことは、「一番美しい瞬間」がすでに死を孕んでいたことを示す。「髪型」に「アウシュヴィッツ」のイメージが重なって見られたように。そして、「8月」はケネディーの「突然」の死の、わずか3カ月前のことであった。

若さと光輝のauraを負った「ケネディー大統領」が、在任期間3年に充たずして「頭を撃ち抜かれ」、暴力的な死に見舞われたことと、「仏文科の女子学生」の「突然」の死がパラレルに置かれていることは明らかだ。そして、ここでも「14歳」という青春のとば口は、すでに死の影にひたされているのである。

結局『風の歌を聴け』において、「1963年」は「14歳」という青春のめざまめの年であり、かつ死のめざまめの年であるということだ。

さて、「エルヴィス・プレスリーの主演映画」の「主題歌」の、「僕」が「こんな唄だった」として紹介している歌詞を見てみよう。

わずか十行からなる断章の半分がこの歌詞で占められていることからして

も、この歌詞が物語の中で果している役割の小さくないことが知れよう。

引用されているのは、Return to Sender (1962年発表)、邦題が「心のとどかぬラヴ・レター」というプレスリー・ナンバーの歌詞の一節である⁸⁾。

「僕」は「思い出し」⁽⁷³⁾て、「こんな唄だった」と言っているのであり、歌詞の翻訳でもあるのだから、意識であってよいし、英語原詞との間に多少の異同があっても当然と言える。だが、見すごし難い相違が一つある。

『風の歌を聴け』の訳詞では、普通に読めば、「彼女」は「手紙」を受けとらぬまま行方知れずとなっていて、「手紙」は「宛先不明、受取人不明」と郵便局員に記されて「返ってきた」ととれる。ところが英語原詞では、「リターン・トゥ・セNDER発信人に返送」と「彼女がその〔手紙の〕上に書いた」⁹⁾となっているのだ。この変更は意味深長である。

「僕」が「初めてデートした女の子のことを思い出した」のは、「小指のない女の子」の「部屋」⁽⁶⁸⁾で「食事」⁽⁷⁰⁾を共にしたあとの「帰り道」のことである。そして、「小指のない女の子」は「僕」に、「ねえ、あなたに迷惑かけていないかしら？」⁽⁷³⁾と問いかけていたのだった。その問いと、「ねえ、退屈じゃない？」という「僕」の問いとは響き合う。

まるで初めて恋を知りつつあるかのような「小指のない女の子」の自意識と不安にみちた問いかけと、「テーブル越しにそっと手を伸ばして僕の手を重ね、しばらくそのままにしてから元に戻した」⁽⁷³⁾という初心な仕種の意味を理解したからこそ、「僕」は彼女と同じような立場にあったときの自分の気持を「思い出」すのである。

それに「小指のない女の子」のイメージは、「僕」にとって、初めから思春期のめざめと結びついている。「僕」が初めて彼女と口を利いたとき、「彼女は僕を少しばかり懐しい気分にした。古い昔の何かだ」⁽³¹⁾と言う。

そして「僕」は、最後に「小指のない女の子」に会ったときも、その「肩を抱」きながら、「夏の香りを感じたのは久し振りだった」、「女の子の肌の手ざわり」、「淡い希望、そして夏の夢」⁽¹⁰⁷⁾と言う。それは「昔の夏」の、

「微かな予感」にふるえる「いつ果てるともない甘い夏の夢」(27)のことである。「そしてある年の夏(いつだったろう?) 夢は二度と戻っては来なかった。」(81) つまり「夏の夢」とは思春期にある者の見るもの、思春期そのものでさえあって、その目ざめとともに喪失をも、「小指のない女の子」は「僕」に思い起こさせたということなのである。

「小指のない女の子」は、結局「僕」の前から「跡も残さずに消え去って」(118)しまう。「僕」の心の中で、「僕」に対する「小指のない女の子」の気づかいと、「初めてデートした女の子」に対する「僕」の気づかいとがパラレルに置かれたことから、プレスリーの「唄」が思い出されたのだが、その歌詞の「宛先不明、受取人不明」は、「小指のない女の子」の失踪を予告するものでもあった。そしてまた、「僕」の心に寄り添うかのように「僕の手に重ね」られた彼女の「手」は、「僕の手」がそれに応えようとしたときには「元に戻」され、「消え去って」いるのではないかという不吉な予感が、「僕」にこの「唄」の文句を「思い出」させたとも言える。

「初めてデートした女の子」と「僕」のその後については何も語られていない。プレスリーの「唄」はまた、この「女の子」自身が「宛先不明、受取人不明」となったことを暗示しているかのようだ。

(2) 最初の女の子

「僕」は、「これまでに三人の女の子と寝た」と言う。その中の「最初の女の子」のことである。

「最初の女の子は高校のクラス・メイトだったが、僕たちは17歳で、お互いに相手を愛していると信じこんでいた。夕暮の繁みの中で彼女は茶色のスリッポン・シューズを脱ぎ、白い綿の靴下を脱ぎ、淡い緑のサッカー地のワンピースを脱ぎ、あきらかにサイズの合わないとわかる奇妙な下着

を取り、少し迷ってから腕時計も取った。それから僕たちは朝日新聞の日曜版の上で抱き合った。

僕たちは高校を卒業してほんの数カ月してから突然別れた。理由は忘れてたが、忘れる程度の理由だった。それ以来彼女には一度も会っていない。眠れぬ夜に、僕は時々彼女のことを考える。それだけだ。』(58-59)

「1970年の8月」に「21歳」である「僕」が「17歳」であったのは、4年前の1966年で、「3年前の春」に「大学に入った」⁽¹⁵⁾というから、そのとき「僕」は「高校」三年生であったことになる。平服で夏物の「サッカー地のワンピース」を「女の子」が着ていたということから、季節は夏、またはそれに近い頃で、ある「日曜」日の「夕暮」と推定できる。

1966年といえば、前年の秋からこの年の6月にかけて続いた、早稲田大学の学生会館・学費値上げをめぐる紛争のことが思い起こされる。それは翌年から本格化する大学紛争の走りの一つとも言うべきものだった。また、前年に北爆を開始したアメリカ軍は、この年最大規模でベトナム戦争に参戦しつつあった。そしてまた、1966年は文化大革命の始まった年でもあった。

60年代後半に起きた政治的・社会的な出来事、とりわけ反体制的な運動の報道において、全国紙たる「朝日新聞」の果たした役割は決して小さいものではなかった。ただ、その「日曜版」ともなると、そうした問題が扱われることはまれであったはずだ。

『風の歌を聴け』の中には、欧米の作家の名や作品の題名は数多く出てくるが、日本のものについては、ただ一つ「朝日新聞」の名が、しかもその「日曜版」があるにすぎない。

そのことが象徴しているのは、この作品における、60年代後半から1970年のはじめにかけて日本が置かれていた政治的・社会的状況の捨象である。なるほど、「電車もバスも何もかもが完全に止まっていた」、「新宿で最も激しいデモが吹き荒れた夜」のことが、「催涙ガス」⁽⁵⁹⁾のことが語られ、「僕の

大学と東京での生活について」の「話」(70)の中には、「デモやストライキの話」があり、「僕は機動隊員に叩き折られた前歯の跡を見せ」(71)でもいる。しかし、どのような政治的・社会的問題をめぐっての「デモ」や「ストライキ」であったかは、一切触れられていない。

それは逆に言えば、「1970年の8月」のちょうど一年前、1969年8月に「大学の運営に関する臨時措置法案」が国会で可決成立、施行された後、相つぐ大学への「機動隊」の導入によって紛争は劇的に沈静化へと向かい、続いて翌1970年6月に日米安全保障条約の自動延長が決定されると、それをほぼ境として学生運動およびそれを大きな水源としていた社会運動一般が退潮していった、少なくとも60年代後半の昂揚は二度と見せなくなったという、70年代以降の日本の政治的・社会的状況をよく映しているということでもある。

70年代に一般化するのには、友好的な「パートナー」としての日米関係という観念だけではなく、それと意識さえされなくなるほど日常的なこととなった欧米化、とりわけアメリカ化である。「ケネディー」と「アイゼンハワー」(89)というアメリカの大統領であった二人の人物の名があつて、しかも「僕」は「ケネディー大統領の死んだ年」を、自分の人生を時間軸上に位置付けるための指標とし、「鼠」は「ケネディー・コインのペンダント」を「胸に吊し」(91)てまでいるのに、日本の首相の名はない。それだけではなく、『風の歌を聴け』には音楽・映画・文学などの芸術の分野でも、欧米の芸術家や作品のタイトルは頻出するが、日本のそれは何ひとつ出てこない。

日常生活にまで浸透していったアメリカ化、あるいは少なくとも欧米化は、日本の「僕」の「街」(82)を主な舞台とするこの物語の中に出てくる飲食物の名にも見てとることができる。

「ピザ・パイ」(16)、「オイル・サーディン」(21)、「ドーナツ」(23)、「コーヒー・ロール」、「アップル・パイ」、「パンケーキ」、「クロワッサン」(24)、「

「クッキー」, 「ソーセージ」(25), 「フライド・ポテト」, 「バウムクーヘン」, 「グレープフルーツ」, 「コーンビーフのサンドウィッチ」(36), 「ポテトチップ」(37), 「チーズ・クラッカー」, 「スパゲティー」(45), 「ビーフ・シチュー」(67), 「ロールパン」(70), 「ホット・ケーキ」, 「ポップコーン」(77), 「トースト」(80), 「バニラ・アイスクリーム」, 「カマンベール・チーズ」, 「ボーンレス・ハム」, 「トマト, キュウリ, アスパラガス, レタス」と「ドレッシング」(99), 「レタスとソーセージ」の「サンドウィッチ」(101)。飲物は, 「ビール」(12), 「オレンジ・ジュース」(23), 「ギムレット」(37), 「コーラ」(42), 「ジンジャー・エール」(62), 「白ワイン」(64), 「ジム・ビームのロック」(75), 「リンゴ・ジュース」(80), 「バーボンのロック」(85), 「牛乳」(99), 「コーヒー」(100), 「ブラディー・マリー」(103)。

この根こそぎのアメリカ化の表現にはむろん誇張がある。だが、70年代以降の日本の社会を浮き立たせてきた奇妙な明るさ、浮遊するような軽快さが、デラシネの者のそれであることをよく表現しえているとも言える。

このように見てくると、「僕の話」の主な舞台が「1970年の8月」に設定されていることには、深い意味のあることがわかる。「1970年の8月」を境として、学園も社会も一変する。それは時代のターニング・ポイントであった。振りかえれば、置き去られ急速に遠のいてゆく60年代の暗く重い後姿がまだ見えはするが、前方からは、残された空白の隅々にまでまたたく間に浸透してゆく70年代の軽快で明るい気分が足早に近づいてくるという、光と影の交叉する時点、つかの間の猶予の期間であった。『風の歌を聴け』は、70年代の気分で奏でられた60年代のレクイエムである、とも言えるのだ。

1965年の「朝日新聞の日曜版の上で抱き合」うふたりの「高校」生に私たちが重ね合わせに見ているのは、70年代の若者たちの姿なのでもある。それは「ポップ・コーン」のように軽い、「スリッポン・シューズ」のように簡単に「脱」ぐことのできる「愛」だ。

この「最初の女の子」は、「僕」と「突然別れ」てしまう。その「理由は忘れた」、つまり今となつては「理由」も分らない。そして、「僕」は「それ以来彼女には一度も会っていない」と言う。ここに「僕」と「小指のない女の子」との関係とパラレルなものを見てとることができる。「小指のない女の子」もまた「僕」の前から「突然」のようにして「跡も残さずに消え去つ」てしまい、「僕は二度と会えなかった」のである。

(3) リクエスト曲をプレゼントした女の子

「1970年の8月」のある日、「ラジオN.E.Bのポップス・テレフォン・リクエスト」⁽⁴⁵⁾の「アナウンサー」⁽⁴⁶⁾が「僕」に「電話」⁽⁴⁵⁾してくる。「ビーチ・ボーイズの〈カリフォルニア・ガールズ〉」を「リクエスト曲」として「僕」に「プレゼントした女の子」が「いる」、「誰だかわかるかい?」と言う。「僕」は最初「全然わからないと言った」、つまり忘れていたのだ。そのあと「僕」は、「修学旅行の時に落としたコンタクト・レンズを捜してあげて、そのお礼にレコードを貸してくれた」「クラスの女の子」がいたことを「思い出」⁽⁴⁶⁾す。それは「5年前」のことで、「彼女の名前」も「僕」は「思い出した。」⁽⁴⁷⁾

その「彼女の名前」⁽⁵⁵⁾を唯一の手がかりとして、「僕」は彼女の「電話番号を捜し」⁽⁵⁴⁾、「住所」⁽⁵⁵⁾をつきとめようとする。その結果、彼女が「僕」の「街」⁽⁸²⁾の「山の手にある二流の女子大の英文科」に入ったことを知るが¹⁰⁾、その「大学の事務所」に問い合わせると、「今年の3月に退学届けを出した」、「理由は病気の療養」だということしかわからない。「事務員」の教えてくれた「古い住所」は「学校に近い下宿屋」で、「女主人らしい人物」が言うには、「彼女は春に部屋を出たつきり行く先は知らない」ということだった。そして、「それが僕と彼女を結ぶラインの最後の端だった。」⁽⁵⁵⁾

この後、「ビーチ・ボーイズのLPを貸してくれた女の子」⁽⁵⁴⁾のことが「僕

の話」の中で語られることは、少なくとも明示的にはない。第39章の「後日談」の中で、『『カリフォルニア・ガールズ』のレコード』を「僕」は「何度も聴く」(119)と言いながら、その「レコード」を「貸してくれた女の子」に触れることはない。

「1970年の8月」からみて「5年前」とは、1965年のことであり、「〈カリフォルニア・ガールズ〉の入ったビーチ・ボーイズのLP」とは、同年発売されたアルバム「サマー・デイズ」を指していよう¹¹⁾。新譜だからこそ、「貸してくれた」ことが「お礼」の意味をもったのだ。

「リクエスト曲をプレゼントした女の子」をめぐる「僕」と「アナウンサー」のやりとりと、「僕」の行動には奇妙なところがある。「僕」は「思い出し」た「彼女の名前」を頼りに、彼女の「正確な住所と電話番号」を自分でさがし出そうとする。ということは、「アナウンサー」がそれを教えなかったということだ。「アナウンサー」自身が知らなかったということだろうか。「テレフォン」で「リクエスト」(45)したとき、「彼女」は「名前」だけ告げて、「住所と電話番号」は明かさなかったのだと。しかし、「アナウンサー」は「彼女、もちろんラジオは聴いてるね?」と呼びかけ、「彼がレコードを買って返してくれるそうさ。よかったね」(47)と言っている。彼自身が彼女の住所を知らないとすれば、「僕」が「返してくれる」などと言えるだろうか。それに「僕」のほうも、「よかったね」のあと、彼女の「住所」と「電話番号」を教えてくれるよう「アナウンサー」に頼んでもいない。

さらに「僕」は「高校の事務所に行って卒業生名簿を調べあげ、それ〔電話番号〕をみつけ」たが、「その番号にかけてみると、もう「使われて」(54)いなかったというのだが、「名簿」に併記されていたはずの「住所」は見すごしてしまう。

「僕」が「彼女の進んだ大学」の「事務所」に問い合わせたときも同様に、学籍簿に「下宿」(55)の「住所」と並んで記されているはずの帰省先や本籍地

の住所のことは素通りしてしまう。

まるで「アナウンサー」と「僕」との間には暗黙の了解があるかのようだ。「アナウンサー」は「よかったね」と言ったあと、「ところで君は幾つ」(47)と話題を変えてしまい、「僕」は「レコードを買って返すために必要な「彼女」の「連絡」(55)先を聞くタイミングを失う。「僕」のほうも、「放送局」(40)にたずねればすむものを、わざわざ自分で「捜し」、しかも「彼女」の実家にあたることもしないで、迂遠な道に踏み迷う。「僕」と「アナウンサー」ふたりして、「彼女」の「正確な住所と電話番号」から遠ざかろうとしているかのようであり、「彼女」が「宛先不明」となることを望んでいるかのようだ。

「リクエスト曲をプレゼントした女の子」自身の振舞いもまた謎めいている。

「アナウンサー」が「僕」に「電話」できたのは、彼女が「僕」の「電話番号」(56)か住所、あるいはその両方を「放送局」に教えたからだろう。しかもそれは「僕」の「帰省中」(65)の「住所と電話番号」だ。彼女は「僕」の「夏休みと春休み」に「街に帰ってくる」(84)習慣を知っている。そのことは、「僕」が「東京」の「大学」(70)に行き、彼女が「僕」の「街」の「山の手」にある二流の女子大に進んだのちも、彼女のほうは「僕」の消息を知っていたことを意味する。他方「僕」のほうは、高校卒業後の彼女の消息については何ひとつ知らなかった。「彼女の名前」さえ「やっと思い出した」(47)。少なくともふたりの大学進学ののち、「僕」が彼女と出会う機会は一度もなかったということだ。

いったい何のために「女の子」は「リクエスト曲」を「僕」に「プレゼント」したのか。「5年前」に「僕」に「貸し」た「レコード」を「返して」もらうためか。それなら、直接「僕」に電話か手紙で請求すればすむことだ。あえてラジオ放送という、しかも「アナウンサー」の口を通してという、二重に間接的な連絡手段をとった理由は何か。それに放送中の「アナウ

ンサー」と「僕」のやりとりを「聴いてる」彼女は、「レコード」の「返し」先を、「アナウンサー」が言わず、「僕」もたずねなかったことも知っている。にもかかわらず、彼女は「僕」に自分の「連絡」先を伝えるための何の手だてもうってはいない。彼女の目的が、「貸し」た「レコード」を「返して」もらうことになかったことは明らかだ。

「僕」が彼女のことを「誰だかわかる」と「当た」りとなって、「僕」に「特製のTシャツが送られることになってる」⁽⁴⁶⁾という。つまり彼女は、「5年前」の彼女とのことをきっかけとして「僕」が「彼女の名前」を、彼女のことを「思い出してくれ」⁽⁴⁶⁾るかどうかが試したということだ。何のために。「5年前」、「レコード」の「貸し」・「借り」⁽⁴⁷⁾以上のことが彼女との間にあったのかどうか、「僕」は何も語っていない。しかし彼女の意図が「僕」に「レコード」を「返して」もらうことになかったとすれば、彼女の「僕」に寄せる何かの思いが、「レコード」のことを口実として「僕」に呼びかけさせたと考えるほかない。

それでは「女の子」は、「僕」との再会や、よりをもどすことを期待していたのだろうか。それならなおさら、彼女が自分の「連絡」先を「僕」に直接にも間接にも知らせようとしなかったのは不可解である。

結局、確実に言えることはこうだ。「僕」は「女の子」のことをすっかり忘れていた。つまり、彼女は「僕」にとって「存在してい」⁽⁵⁵⁾なかった。それが「僕」に間接的に呼びかけることで、「僕」の「記憶の片隅」⁽⁴⁶⁾からよみがえる。「僕」は彼女の「存在」するところを「捜」すが、「行く先」不明であり、「それが僕と彼女を結ぶラインの最後の端だった。」「僕」が見出したのは、彼女の「存在」の、いわば永遠の不在なのだ。それは不在であることで「僕」を誘い、そのあとを追う「僕」の前に「存在」しつづける。不在の現前、それが彼女の「存在」の仕方だ。

過去からよみがえり、生者の口を借りて私たちに語りかけ、その「存在」を思い出させるが、私たちがその「存在」の跡をたどろうとしても、その証

の「ライン」が途中で断ち切れていて、その「端」から先のことについては何も知ることができない。そのような「存在」から連想されるのは、死者の霊である。

「リクエスト曲をプレゼントした女の子」が黄泉よみがえ還った死霊であるとすれば、「アナウンサー」は霊媒の役割を果たしたことになる。「ラジオ N.E.B」の「N.E.B」は、「新英訳聖書」ニュー・イングリッシュ・バイブルの略号でもある。「新約聖書」は死んでよみがえった者の教えを伝える書物であり、伝道師はその教えを「アナウン知らせる者」と言えるだろう。

彼女が死霊のよみがえりであるとする、先に述べた不可解なところも納得がゆくものとなる。「アナウンサー」も彼女の「住所と電話番号」を「僕」に言わず、彼女自身もそれを「僕」に知らせるどんな手だてもとらない。そして、「僕」もまたそこからわざとのように脇道にそれ、彼女の「正確な住所と電話番号」にたどりつくことはできない。当然である。死霊に「住所」も「電話番号」もあるわけではないのだから。

「リクエスト曲をプレゼントした女の子」で印象深いのは、その「存在」の孤立、影の薄さ、そして穢れたものであるかのようにかわりを忌避される場所である。「僕」の「かつてのクラス・メイトだった何人か」の「誰も彼女について何も知らなかったし、大部分は彼女が存在していたことさえ覚えてはいなかった。」そして「下宿屋」の「女主人らしい人物」は、「彼女」の「行く先は知らない、と言って電話を切った。知りたくもない、といった切り方だった。」(55)

どうしても「彼女と連絡をとりたい」はずの「僕」だが、「彼女の名前」(55)で電話の「番号調べ」(54)を頼む。「彼女」の実家のことも身寄りのことも「僕」の念頭にはなく、「彼女」は天涯孤独の身と決めこんでいるようだ。それも当然と言える。一家団欒中の死霊など思いもよらない。

「交換手」が「そういったお名前ではどうも電話帳には載っていません」と言うのも、「彼女の名前」が生前のそれであるからだろうし、「僕」が二度

まで「彼女の名前」(47, 54)を口にしながら、それを表記することはしないのも、それが忌み名であるからだとすれば納得がいく。

さて、「リクエスト曲をプレゼントした女の子」が死の淵からよみがえった者であるとするなら、その残る思いとは何かと考えたとき、思いつくのは「仏文科の女の子」(119)のことである。「仏文科の女の子」は、「僕」とおそらく同じ「東京」(70)の「大学」の「女子学生」(60)で、「仏文科の女の子」の項で述べるように、「1970年」(12)の「春休み」に「首を吊って死んだ。彼女の死体は新学期が始まるまで誰にも気づかれず、まるまる二週間風に吹かれてぶら下がっていた。今では日が暮れると誰もその林には近づかない。」(60)「何故彼女が死んだのかは誰にもわからない。」(79) そのとき彼女は「僕」と同年の「21」(78)歳であった。

「リクエスト曲をプレゼントした女の子」も、「僕」の「街」の「山の手にある二流の女子大の英文科」(55)だが「女子学生」(60)で、「病気の療養」を「理由」としてではあるが、「今年 [=1970年]の3月」つまり「春」休みに「退学届けを出した。」大学「事務員」はそれ以上のことは「何も知らなかった」し、その後の「行く先」も誰も「知らない」(55)。そのとき彼女の年齢は、「僕」と高校で一緒の「クラス」だったのだから、「僕」と同じ「21」(46)歳であるだろう。

そして「僕」の「かつてのクラス・メイト」の「大部分は彼女が存在していたことさえ覚えてはいなかった」(55)というように、「仏文科の女の子」も、その「死」が「まるまる二週間」、「誰にも気づかれ」なかったというほどにその「存在」は希薄で、「僕」以外に彼女に関心をもつ者もなく、彼女も天涯孤独の身であるのか、その身寄りや実家に「僕」が触れることもない。また、「死」の穢れによって、その「存在」は忌避されるものともなる。

このように「病気」と「死」という違いはあるが、同じ「春」に「僕」との間を「結ぶライン」を、「僕」にも「誰」にも「何故」か「わからない」

ままだに断ち切ってしまうこれらふたりの「女の子」の影が重なり合うところが多い。「春」に「学校に近い下宿屋」の「部屋を出たつきり行く先は知れなくなったという「女の子」の影は、同じ「春休み」の、「大学」の「テニスコート」の脇にあるみすばらしい雑木林の中で首を吊って死んだ」(60)という「女の子」の影におそらく重なっていくのである。

「リクエスト曲をプレゼントした女の子」がそのひとつの手で「仏文科の女の子」に結びついているとすれば、もう一方の手は「小指のない女の子」の手と結んでもいる。

「僕は」リクエスト曲をプレゼントした女の子の「名前」を「当」(46)でたことで放送局から景品として送られてきた「Tシャツを着て」(50)、「アナウンサー」が「買ってでも返した方がいい」(47)とすすめた「〈カリフォルニア・ガールズ〉の買ったビーチ・ボーイズのLP」を「買いに」出る。「偶然」に入った「小さなレコード店」で、「僕は」小指のない女の子に再会する。「カリフォルニア・ガールズ」の「レコード」(50)がふたりの「女の子」をつなぐ環になっているわけだ。それは、「リクエスト曲をプレゼントした女の子」のことが語られる第12章と「小指のない女の子」との再会が語られる第14章との間の第13章(48-49)が、「カリフォルニア・ガールズ」の歌詞だけで占められていることでもわかる。舞台にたとえれば暗転にあたり、そこで読者は「主題歌」に等しい「レコード」を聴く。そして、「レコード」の回転とともに舞台もまわり、背景と衣裳を変えてまたひとりの「女の子」が登場するのである。

先に見たように「リクエスト曲をプレゼントした女の子」の家族のことはまったく触れられていず、彼女は天涯孤独であるという印象をうける。「小指のない女の子」のほうは、その「家族」(63)、「両親」(62)と「双子の妹」(63)のことが語られている。また、前者は少なくとも「今年の3月」までは「女子大の英文科」(55)の学生であったが、後者は「小さなレコード店」の「女

の子」(50)だ。ふたりの境遇の違いは大きいように見える。

しかし、「小指のない女の子」の「家族」は「お父さん」の「死」とともに「空中分解」し、「お母さん」は「何処かで生きてる」,「双子の妹」は「三万光年くらい遠く」に「居る」(63)というにすぎない。彼女も天涯孤独のよう¹にして生きている。また、「僕」が「二度」目に「会」おうとしたとき、「彼女はレコード屋をやめ、アパートも引き払っていた。そして人の洪水と時の流れの中に跡も残さず²に消え去っていた。」(118)つまり、「レコード屋」と「アパート」が「僕と彼女を結ぶラインの最後の端だった」(55)わけだ。「レコード屋」と「大学」(55),「アパート」と「下宿屋」(55)がパラレルな位置にあることがわかる。

「リクエスト曲をプレゼントした女の子」の「下宿」は「学校に近い」ところにあり、「大学」は「山の手にある」(55)。「小指のない女の子」の「アパート」は「港」から「30分かけて」「坂道を上」(108)つたところに、したがって同じく「山の手」にある。

「小指のない女の子」の「仕事」(32)は「小さなレコード店」の「店番」(52)なのだが、いかにも女子学生風でもある。「生物学」(65)を専攻している「僕」に話を合わせるためではあるが、「テレビ」の「生物学者と化学者の討論会を見た」(69)と言い、「僕」が「パスツール」と「ジェンナー」をとりちがえると、「よく大学に入れたわね」と「あきれた顔」をし、「Q.E.D [証明終了]」(70)と学生用語を口にしもする。そして、「YWCA」で「フランス語会話」(98)を受講している。「今年の3月に退学」(55)した「女の子」が「8月」(12)には「レコード屋」の「店番」をしているとしても不思議はないだろう。

「リクエスト曲をプレゼントした女の子」の「退学」の「理由は病気の療養」とされているが、「何の病気なのか」(55)は不明なままである。「小指のない女の子」も「病気」(107)のようだ。ふたりは同じ「精神」(23)の病におかされていたと考えることもできる。

「僕」に対する「リクエスト曲をプレゼントした女の子」の「存在」の特徴は不在＝現前、言いかえれば、誘惑＝拒絶にあった。「小指のない女の子」に対するその「お母さん」のかかわり方についても同様のことが言える。

「お母さん」が「何処かで生きてる」と知れるのは、「年賀状が来る」⁽⁶³⁾からで、「何処かで」というのは、その年に一度の便りに「住所と電話番号」が書かれていないからにちがいない。それは自分の「存在」を相手に思い出させるだけの音信であり、相手の応答を期待しない一方的な呼びかけである。いわば不在のままの現前で、受取人からすれば、「三万光年くらい遠く」からの「愛」⁽⁵⁸⁾の呼びかけだ。言いかえれば、「愛」の拒絶である。

(4) ヒッピーの女の子

「1970年の8月」に「21歳」である「僕」がそれまでに「寝た」「三人の女の子」のうちの「二人目」である。

「二人目の相手は地下鉄の新宿駅であったヒッピーの女の子だった。彼女は16歳で一文無しで寝る場所もなく、おまけに乳房さえ殆んどなかったが、頭の良さそうな綺麗な目をしていて。それは新宿で最も激しいデモが吹き荒れた夜で、電車もバスも何もかもが完全に止まっていた。」⁽⁵⁹⁾

『風の歌を聴け』の主要な舞台は、「僕」の「街」⁽⁸²⁾である。それは、「僕」が生まれ、育ち、そして初めて女の子と寝た街⁽⁸²⁾であり、そこで「僕は18年間」過ごす。

「僕」は「東京」⁽⁶⁵⁾の「大学に入った」1967年の「春にこの街を離れた」あと、「夏休みと春休みに」「街に帰ってくる」⁽⁸⁴⁾。その「1970年の8月」の「夏休み」の出来事が「僕の話」⁽¹¹⁷⁾の主な内容である。

この「僕」の「街」には名前がない。「僕」は「夜行バス」⁽¹¹⁶⁾で「東京に

帰る」という。したがって日本の地方都市であるはずだが、特定することはできない。

「僕」が「この街について話す」ところによれば、「人口は7万と少し。この数字は5年後にも殆んど変わることはあるまい。その大抵は庭のついた二階建ての家に住み、自動車を所有し、少なからざる家は自動車を2台所有している。」⁽⁸²⁾「僕」が「話」している1978年に「人口は7万と少し」で、その後も「この数字」はあまり「変わ」らないだろうとされていること、1970年代の後半という時代を考慮すれば、「その大抵」の住民が裕福に暮らしている「街」であることがわかる。

それは「海から山に向かって伸びた惨めなほど細長い街」で、「街の中」には、「市役所」⁽¹⁷⁾、「川とテニス・コート、ゴルフ・コース、ずらりと並んだ広い屋敷、壁そして壁、幾つかの小綺麗なレストラン、ブティック、古い図書館」⁽⁸⁰⁾があり、その「山の手」には「アメリカ人の泊り客」も多い「プール」付きの、「旧華族の別邸を改築したホテル」⁽⁸⁸⁾があり、「二流の女子大」⁽⁵⁵⁾もある。「フランス語会話」を学べる「YWCA」⁽⁹⁸⁾があり、「僕」の行きつけの「ジェイズ・バー」には「フランス人の水兵」⁽³⁶⁾の姿もある。

「港」⁽¹⁰³⁾には「倉庫街」⁽¹⁰⁴⁾、「貿易会社」、「港湾鉄道の軌道」、「造船会社のドック」があり、「ギリシャ籍の貨物船」⁽¹⁰⁵⁾が見える。

国際港をかかえ、描写されている港風景からすれば、相当大きな海港都市と想像される「街」の「人口」が「7万」程度というのはありそうもないことだ。この矛盾をなくすために、単行本版以降の『風の歌を聴け』では、新人賞受賞作として雑誌『群像』に掲載された初出稿にはなかった説明が、「人口は7万と少し」¹²⁾の前に加えられた。「前は海、後ろは山、隣には巨大な港街がある。ほんの小さな街だ。港からの帰り、国道を車で飛ばす時には煙草は吸わないことにしている。マッチをすり終るころには車はもう街を通りすぎているからだ」⁽⁸²⁾と。

初出稿への加筆訂正はここだけではない。たとえば、第35章の「僕」と

「小指のない女の子」との会話の中で、「冬にはまた帰ってくるさ。クリスマスころまでにはね。12月24日が誕生日なんだ」という「僕」の言葉から数行おいて、「なんとなく損な星まわりらしいな」と「僕」は言う。単行本版以降では、ここに「イエス・キリストと同じだ」が加えられた。また、「また会えるさ」という「僕」の言葉と「彼女は肯いた」¹³⁾という地の文は、「きつとまた会えるさ」と「彼女は何も言わなかつた」(105)に変えられた。

こうした改稿が適切なものであったかどうか疑問が残る。一読者としての感想を言えば、それらは辻褃合わせであり、悪い意味での説明と映る。「彼女は何も言わなかつた」は、確かに、「僕」が「彼女」と「二度と会えなかつた」(118)ことの伏線とはなるが、その分、初出稿のもっていた含蓄を失わせてもいる。

ついでに言えば、先に引用した文の中の「二階建て」が初出稿では「2階建て」であったように、初出稿でアラビア数字で表記されていたものが、単行本版以降では大巾に漢数字に改められている。この改変もむしろ常識的判断への譲歩と見え、初出稿の文体のもっていた斬新な魅力を弱める結果になっている。

「僕」の「街」にもどると、作者村上春樹の経歴を見れば、「僕」が描写するような地勢と、1978年当時「7万」程度の「人口」をもつ「小さな街」は芦屋市を、その「隣」の国際的な「巨大な港街」は神戸市をモデルにしたものと推察がつく¹⁴⁾。

しかし、「僕」をはじめ作中人物の語る言葉はすべて標準語であり、「街」が関西にあることを示すようなディテールは一切ない。裕福な住民の多い「ハイカラな」港町ということから、初出稿の読者の中に、「僕」の「街」のモデルを「湘南地方」にもとめる者がいたのも無理はない¹⁵⁾。

要するに「僕」の「街」は日本のどこかにありそうで、現実にはどこにもない「街」、架空の地方都市なのである。それは60年代と70年代の狭間にできたエア・ポケットに浮遊する空中楼阁、「夢」(81)の「街」なのだ。

「この話は1970年の8月8日に始まり、18日後、つまり同じ年の8月26日に終る」(12)と言われている「僕の話」が、実際には19日間を超えてひろがっていることについてはすでに指摘があるが¹⁶⁾、「僕」の「街」の空間についても同様のことが言える。それは夢幻的な、非合理的な空間なのである。

作中人物のひとり「鼠」は、あるときは「アパート」(29)住いだが、またあるときは「三階建ての家」に「父親」と「住んで」(83)いるとされている。

「小指のない女の子」の「アパート」(108)は、「僕」が最初に見たときは、「ドアの横にある簡単な流し台」(26)の付いた「六畳ばかりの部屋」で、「安物の家具をひとつおり詰め込んだ後には人間ひとりかやと横になれる程度の空間しか残ってはいない」(33)と描写されている。「小さなレコード店」の「店番」の独り住いにふさわしい「部屋」の有り様である。しかし「僕」が二度目にその「部屋」を訪れたときは、「狭い」(71)ながらも「台所」があり、そこから「彼女」は「シチュー鍋とサラダ・ボールとロールパンを持って戻ってきた」(70)と、「僕」は「彼女」とふたりで「テーブル」(71)につき、「プレイヤーでレコードを聴きながらゆっくりと食事をした」(70)と、そして「食後」は「狭い台所に並んで食器を洗ってからテーブルに戻」(71)ったと言われている。安アパートの六畳間がいつの間にか1DKのワン・ルーム・マンションに変っている。

また、「僕」の「家」(28)はどこにあるのか。「小さい頃」(23)、「僕は電車とバスを乗り継いで医者家に通」(24)だったが、その「医者家は海に見える高台に」(23)あったという。他方、「僕」は「家」から「海岸通り」まで「車に乗って散歩にでかけ」(28)る。とすると、「僕」の「家」は、「海から山に向かって伸びた惨めなほど細長い街」(80)の中ほどに位置すると考えてよいのだろうか、判然としない。

それにもし「僕」の「小さな街」と「巨大な港街」とをはっきりとした境界線で分つなら、「見なれない制服を着たフランスの水兵」(36)が立ち寄れる「ジェイズ・バー」は「港」の近くにあるはずだし、「小指のない女の子」の

「アパート」は「港」から「歩い」て「30分」(108)の所にあるし、彼女の働いている「小さなレコード店」も「港の辺り」(50)にあり、「ラジオN.E.B」(41)の「放送局」(42)は「港まで歩」(114)いて行ける所にあるといったように、物語の中の主だった場所の多くが「巨大な港街」に移って、「僕の話」は、「僕」の「街」を舞台の中心にするものではなくなってしまうだろう。

「僕」の「街」が「夢」の、幻想の空間であると考えれば、その「街」の多くの場所にかかわるあいまいさや、辻褃の合わないところも受け容れられるものとなる。「僕」が「本を読んで」いて「聴いて」もいない「ラジオ」(45)の「アナウンサー」(46)の「ON」(41)のときのおしゃべりや、「OFF」(42)のときのそれを語るという不合理も納得できるものとなる。「夢」の空間の中では、人は遍在できるのだから。そしてまた、「鼠」の語り出した「小説」(20)をいつの間にか「僕」が語り継いでいるのも(22-23)、不自然とは感じられない。「夢」の物語の中では、夢見る「僕」と他の登場人物がすりかわることはよくあることなのだから。

さて、以上のようにして、「僕」の「街」に名前のないことは、「夢」の、非現実のしるしとみなすことができるとして、その他の「街」に目を転ずれば、『風の歌を聴け』には、実在の地名、「街」の名がいくつか使われていることに気づく。日本に限ると、「奈良」(91)と「東京」(65, 70, 104, 115, 117)が出てきて、その他の実在の地名としては、「新宿」(59)と「目白」(59)、そして「日比谷」(117)があるだけだ。

「奈良」は「鼠」が「古墳」(91)のことを話するとき口にしたのであって、主人公の「僕」の「生活」(70)空間にはかかわりがない。「新宿」・「目白」・「日比谷」はいずれも「東京」にかかわる地名であり、「東京」の名は作品全体で五度現われている。1967年の「春」に「僕」の「街を離れ」(84)て以来、少なくとも1970年までは、「僕」は「東京」で学生「生活」を送り、1978年の今も、「僕は結婚して、東京で暮らしている。」(117)「東京」が「僕の話」

の中で、「僕の街」に次ぐ、副舞台となっていることは明らかだ。

実在のよく知られた地名は、一方では想像力を刺激して幻想の空間を想い描かせもするが、他方では、現実の地理的空間とそれにまつわる歴史を想起こさせる。この中間をいったのが吉本ばななの『キッチン』における「東京」という語の用法である。そこでは「東京」はあくまでも実在の地理的空間の中にとどまりながら、その特徴をなす地理的・歴史的ディテールが限りなく捨象されることで、一般的でむしろ無名に近い都市空間となっている。「東京」の名は一度しか使われていず、都内の地名も何ひとつ出てこないし、東京の地理を想い浮かばせる交通機関の名もない¹⁷⁾。

『風の歌を聴け』では、先述のとおり、「東京」の名はくり返し現われているうえに、東京23区に属する地名が三つあり、しかも「地下鉄の新宿駅」⁽⁵⁹⁾、「日比谷公園」⁽¹¹⁷⁾と、東京の地理を具体的に想い描かせるディテールをとまなっている。つまり、この作品における副次的な舞台としての「東京」は、主要な舞台としての「僕」の「街」が非現実的な、「夢」の空間に浮遊する場所であったのとは対照的に、現実の地理的空間に根を下しているのである。

そのような現実の地理的空間は、現実の時間、歴史によって構成されてもいる。すでに述べたように『風の歌を聴け』には、日本の現代史、とりわけ60年代後半の社会的・政治的な事象、さらには文化的な事象にかかわるディテールは明らかに意図的に省かれているが、数少ないそのようなディテールのいくつかは、「新宿」・「目白」・「地下鉄の新宿駅」の出てくる「ヒッピーの女の子」の挿話に見出されるのは偶然ではないのである。

この項の冒頭に引いた一節を見直すと、「新宿で最も激しいデモが吹き荒れた夜」とある。そして、「催涙ガスのおかげで目がチクチクと痛んだ」⁽⁵⁹⁾ともある。日本の60年代後半の出来事を記憶にとどめている者にとっては、これらのディテールだけで、ここにいう「夜」とは、騒乱罪の適用された1968年10月21日の国際反戦デーの「夜」のことであると推察がつかだろう。

「僕」は1967年の「春」に、「大学」に入るため「東京」に出てきている。その翌年の出来事となる。また、「ヒッピーの女の子」と遭遇した場所が「新宿駅」であるということにも、当時の世相が背景としてあろう。1967年の夏から、和製ヒッピーであるフーテン族が登場したが、彼らがたまり場として衆目を集めたのが「新宿駅」前広場であったからである¹⁸⁾。「スポーツ新聞を読み、「毎日昼すぎに目覚め、食事をして煙草を吸い、ぼんやりと本を読み、テレビを眺め、時折僕と気のなさそうなセックスをした」(60)という「女の子」の日常は、ヒッピーのもつ精神性とは縁遠く、フーテンにこそふさわしい。フーテンという語が用いられなかったのは、「スポーツ新聞」に名がなく、「デモ」にスローガンがないのと同じ理由によるのであろう。日本のとりわけ60年代後半の社会的現実にも示的にかかわる言葉を避けたのである。

「ヒッピーの女の子」の「存在」(55)もまた、「無」に縁取られている。「彼女」は「一文無しで寝る場所もなく、おまけに乳房さえ殆んどなかった」(59)。彼女もまた、「リクエスト曲をプレゼントした女の子」や「小指のない女の子」と同じ様に、たったひとりで生きている。そして、「リクエスト曲をプレゼントした女の子」が自分の「住所と電話番号」を「僕」に教えず、「行く先」を「知」らせず、「僕と彼女を結ぶライン」(55)を一方向的に断ち切っていたのと同様、また「小指のない女の子」が「きつとまた会えるさ」(105)という「僕」の期待を裏切って、「アパートを引き払」い、「跡も残さずに消え去って」(118)しまったのと同様、「ヒッピーの女の子」も、「何処から来たの?」という「僕」の問いに「あなたの知らない所よ」(60)と答えるだけで、その「住所」を教えることを拒み、「ある日」、「彼女の姿は消えていた。」(60)

「ヒッピーの女の子」の「世の中」(113)に対する身の構えは、「閉鎖された改札の中にうずくまって」(59)いたという、「僕」の前に登場したときの姿に象徴的に示されている。常には人の行き交いのためにある「改札」だが、それが「閉鎖された」「中にうずくまって」いたということは、「人通りの途絶

えた」⁽⁵⁹⁾ 無人の、荒涼とした世界に彼女が独りいるということだけではなく、「人」との接触を彼女が拒んでいることを示している。

「ひどい目にあわされる」ことに彼女は「慣れてる」⁽⁵⁹⁾と云う。「世の中」と、「人」と彼女を「結ぶ」⁽⁵⁵⁾ものは「愛」⁽⁵⁸⁾ではなく、敵意である。迫害されることに「慣れ」た野良猫が「人」を前にして毛を逆立てるようにして、彼女は「僕」を前に身構えている。

「何か食べさせてやるよ」と言う「僕」に、「何故食べさせてくれるの?」⁽⁵⁹⁾と彼女は反問する。彼女は「愛」を、善意を「信じ」⁽⁵⁸⁾てはいない。「人」が「食べさせてくれる」のは、「ひどい目にあわされる」ことの代償でしかない。彼女は「一週間ばかり」「僕」に「食べさせて」もらった代りに、「気のなさそうなセックスをし」、「僅かばかりの小銭と、カートン・ボックス入りの煙草、それに洗いたての僕のTシャツ」⁽⁶⁰⁾をかすめとって「消え」る。

「何故食べさせてくれるの」という彼女の問いに、「何故だかは僕にもわからなかった」⁽⁵⁹⁾と「僕」は言う。「僕」もまた、「愛」をたぶん「信じ」てはいないのだ。「僕」は「寝る場所」⁽⁵⁹⁾と「食料品」⁽⁶⁰⁾を差し出し、その見返りとして「時折」の「気のなさそうなセックス」を得ていたと見られても仕方がない。「お互いに相手を愛していると信じこんでいた」「僕」と「最初の女の子」が「寝」て「突然別れた」⁽⁵⁸⁻⁵⁹⁾話のあとで、「二人目の相手」⁽⁵⁹⁾である「ヒッピーの女の子」との「セックス」が語られていることには意味があるのだ。「愛」の幻滅のあとにくるものは、衣食住や金銭を代償として得られる「気のなさそうなセックス」でしかない。

彼女が「洗いたての僕のTシャツ」まで盗っていったのはどうしてなのか。彼女の「バッグ」の中には別に自分用の「2枚のTシャツ」があったのだし、男物であるうえ、「嫌な奴」であるはずの「僕のTシャツ」をもっていってどうしようというのだろうか。たとえ彼女のものが「汚れ」⁽⁶⁰⁾ていて、「僕」のが「洗いたて」であったにしても。

それはおそらく「僕」のしるしなのだ。「ヒッピーの女の子」が「僕」の分身でもあることの。この「16歳」の、「乳房さえ殆んどなかった」というボーイッシュな、「ひどく無口な少女」のかたくなな「姿」(60)に、「14歳」(26)になるまで「ひどく無口な少年」(23)であった「僕」の孤影が重なる。その頃の「僕」が「言葉」(25)によって「表現し、伝達」(26)することを拒否していたのと同様、彼女も自らを「閉鎖」して「口を利かなかつた。」(60)

「僕」が「突然しゃべり始めた」(26)のは、「文明とは伝達である」と教え、「コーヒー・ロールやアップルパイやパンケーキや蜜のついたクロワッサン」を「僕」に「食べ」させながら「治療」(24)してくれた「精神科医」(23)のおかげであったのだが、この「精神科医」の役割を、かつての「僕」の立場にある「少女」を相手として、「僕」は演じようとしたのだろう。それは無自覚のうちになされたので、「少女」に「何故食べさせて」やろうとするのか、当の「僕」にもわからなかつた」ということなのでもあるだろう。

だが、「僕」のアパートに滞在した「一週間ばかり」の間に、彼女のした「表現」らしい表現は、「嫌な奴」という「たった一言」にすぎなかつた。

それが「僕」に面と向かつてのものではなく、「書き置き」という間接的な「伝達」の方法によるものであつたことと、主語が「記されて」いないことから、「恐らく僕のことなのだろう」(60)という「僕」の判断のためらいが生まれる。「僕のこと」でないとしたら、「僕」の「知らない」「奴」のことか。そしてそれは実在の人物か、それとも妄想の所産か。あるいはまた、「僕のこと」でもあり、「僕」の「知らない」「奴」のことでもあるような、「人」一般に向かう漠とした嫌悪感、あるいは敵意の「表現」でもあるのか。

「嫌な奴」という、「たった一言」から漂い出るおぼろな悪意は、間接的に伝わることで発信源もあいまいになり、「何故」そうなのか「わからな」いし、対象も定かでないが、それだけ一層、目に見えない瘴気のように「女の子」の身辺に、「僕」と「女の子」の間に、「僕」のまわりに立ちこめる。それは呪文のように「僕」にとりつく。

このあいまいな、どこかしらおぞましくもある悪意は、「ひどい目にあわされる」ことに「慣れている」という、「世の中」の「人」と「女の子」の基本的な関係のあり方と、そして、「人」の行き交いから「閉鎖」され、自らを「閉鎖」している彼女の「存在」⁽⁵⁵⁾のあり方と、自他の冷やかな敵意に充ちた無関心と不可分である。そして、このような対「人」的な、あるいは「世の中」に対する関係の特徴は、「僕」のかかわった他の「女の子」たちにも、その周辺にも見出される。

「リクエスト曲をプレゼントした女の子」の項で、この「女の子」の孤絶とも言うべき生き方、「存在」感の稀薄さについて指摘しておいた。

「僕がかつてクラス・メートだった何人かに電話をかけて、彼女について何か知らないかと訊ねてみたが、誰も彼女については何も知らなかったし、大部分は彼女が存在していたことさえ覚えてはいなかった。最後の一人は何故だかはわからないが僕に向って、お前となんかは口もききたくない、と言って電話を切った。」⁽⁵⁵⁾

「彼女」の「存在」への、その周囲の人々の無関心は、「彼女」がその「存在」を自ら「閉鎖」していた証でもあるだろう。そして、「僕」が「彼女」にかかわるとき、漠たる悪意が「僕に向」けられる。

「お前となんかは口もききたくない」とは、言いかえれば、「嫌な奴」ということだ。その言葉を伝える「電話」は、「書き置き」と同様、発信者の「姿は消えて」⁽⁶⁰⁾見えない、間接的な伝達手段であるうえ、「最後の一人」というように発信者もほとんど不特定でさえある。そして、受信者であるはずの「僕」にも「何故」そのように言われるのか「わからない」言葉は、「お前」と呼ばれる「僕」を超えて漂う。

この「理由」⁽⁵⁵⁾の「わからない」、発信者も受信者も奇妙にぶれて、あい

まいなものとなる、漠たる呪文に似た言葉から漂い出る悪意は、「僕」に対する「下宿屋」の「女主人らしい人物」の応答にも見え隠れしている。「彼女は春に部屋を出たつきり行く先は知らない、と言って電話を切った。知りたくもない、といった切り方だった。」(55) ここには、ある「人物」の「彼女」への無関心とともに、嫌悪感が見てとれる。「知りたくもない」とは、「嫌な奴」ということだからだ。しかし、この嫌悪は「彼女」のことにかかわろうとする「僕」に向けられてもいると言えるだろう。残るのは、「僕」のまわりに、「僕」と「彼女」の間に漂う、発信者も受信者も確とは見定め難い、漠とした悪意である。

「小指のない女の子」の「家族」は「空中分解」していて、「お母さん」は「何処かで生きてる」というだけだし、「双子の妹」は「三万光年くらい遠く」にいるという。それは彼女と「家族」との間の心理的な距離を、互いの無関心を表わすものであるだろう。そして、それが「家族の悪口」になるというのも、「好きじゃないみたい」(63) というように、漠とした嫌悪の念のこもる無関心であるからだ。

このあいまいな嫌悪の感情には、激しい攻撃心がひそめられている。「僕」が「機動隊員に叩き折られた前歯の跡を見せ」ると、彼女は「復讐したい？」と聞き、「私があなただったら、そのオマワリをみつけだして金槌で歯を何本か叩き折ってやるわ」(71) と言う。また、「彼女は左手でこぶしを作り、右の手のひらを神経質そうに」「赤くなるまで叩きつづけ」(106) た。彼女もまた何物かに向かって毛を逆立て、牙をむいている。

「みんな大嫌いよ」と彼女は言って、その嫌悪感をあらわにするとともに、それが「家族」を超えて、「世の中」の「人」一般に向けられたものであることを示す。「僕も？」と問うと、「あなたは嫌な人じゃないわ」と答えるが、「それほどはね？」と重ねると、「彼女は少し微笑むようにして肯いた。つまり、イエスでもありノーでもある、あいまいなのだ。

ここでは確かに「僕」は、「嫌な人」という言葉を目の前にいる「小指のない女の子」の口から聞く。発信者は特定されていると見える。しかし、彼女は「肯い」た後、続けて言うのである。「一人でじっとしてるとね、いろいろな人が私に話しかけてくるのが聞こえるの。……知っている人や知らない人、お父さん、お母さん、学校の先生、いろいろなよ」、「大抵は嫌なことばかりよ。お前なんか死んでしまえとか、後は汚らしいこと……」(106)と。「みんな大嫌いよ」という「世の中」の「人」一般に向けられた嫌悪の感情と並行して、「家族」や「知っている人」を超えて、「知らない人」をも含む「いろいろな人」、不特定な「世の中」の「人」一般から受けた「嫌なこと」が語られている。二つの事柄は相関的であり、表裏のことなのだ。

そして彼女は言い足す、「病気だと思う？」(107)と。もし彼女が「精神科医」(23)の「治療」(24)を要する「病気」であるのなら、「嫌いな人」という言葉の発信者はあいまいなものとなり、その受信者もまたあいまいなものとなるだろう。精神の病とは、自己があいまいになること、そしてそのことと相関的に相手もまたあいまいになることにほかなるまいから。

残るのは、彼女の身辺に、「僕」と彼女の間に、そして「僕」のまわりに漂い、立ちこめる漠たる嫌悪感であり、見定め難いひそやかな悪意である。

(5) 仏文科の女の子

「僕」が「三番目に寝た女の子」(74)は、「大学の図書館で知り合った仏文科の女子学生」で、「彼女は翌年の春休み」に「首を吊って死んだ」。(60)

「1970年の8月」の7年前になる「1963年8月」に彼女は「14歳」で、「21年の人生」(78)で終わったというのであるから、彼女が「死んだ」のは1970年の「春休み」の2月または3月のことであり、「僕」が彼女と「知り合った」のは、その前年の1969年、留年していなければ「僕」が大学3年生のときということになる。

「僕」は「1969年の8月15日から翌年の4月3日までの間」に、「6921本の煙草を吸」い、「彼女の死を知らされた時、僕は6922本めの煙草を吸っていた」(75)という。

7カ月半ほどの間に「6921本」というと、平均して1日30本、かなりの喫煙量である。よほどのことがない限り、毎日吸っていたであろうから、「6922本め」は4月4日に吸ったにちがいない。そして、「彼女の死体は新学期が始まるまで誰にも気づかれず、まるまる二週間風に吹かれていた」(60)というのであるから、「彼女の死」は、「春休み」の3月20日頃であったと推定できる。「僕」が「新学期が始まるまで」その死を知らなかったのは、「夏休みと春休みに僕は街に帰ってくる」(84)ことになっていたので、「帰省中」(65)であったからだ。

「彼女の死を知らされた時、僕は6922本めの煙草を吸っていた」というのは偶然だろうか。「6922」は「6921」+1で、「6921」をアナグラムとすると、1962と読み替えることができ、これに1を足すと1963となる。つまり、「6922」の下には1963という数字が隠されているということであり、それは「死」を告げる数字であるということだ。そしてこのことは、「初めてデートした女の子」の項で指摘した、『風の歌を聴け』の中の「1963年」は「死」の色に染まっているということと符合している。

さて、くり返しになるが、「僕の話」の中で「仏文科の女の子」のことが初めて語られる件を見直してみよう。

「三人目の相手は大学の図書館で知り合った仏文科の女子学生だったが、彼女は翌年の春休みにテニス・コートの脇にあるみすぼらしい雑木林の中で首を吊って死んだ。彼女の死体は新学期が始まるまで誰にも気づかれず、まるまる二週間風に吹かれてぶら下がっていた。今では日が暮れると誰もその林には近づかない。」(60)

第19節で「僕」は、「これまでに三人の女の子と寝た」と言っ^て、「三人の女の子」のことを順に語っていく。まず、「高校のクラス・メイト」であった「最初の女の子」のこと、次いで、¹行^あけて「東京」の「大学」に進学した後、「地下鉄の新宿駅であったヒッピーの女の子」のこと、最後に、^行あ^け無しに、上の引用文が続き、「仏文科の女子学生」のことが語られている。

「ヒッピーの女の子」の断章は全集版で28行、これにわずか4行ではあるが、別の「女の子」である「仏文科の女子学生」についての話が付け足しのようにして続いている。

引用文中の「大学」は、「僕」の「大学」と言っ^てはいないが、文脈からすれば、そう^とる^ほか^ない^だら^う。「ヒッピーの女の子」と「仏文科の女子学生」の二つの挿話は、同じ「東京での生活」⁽⁷⁰⁾にかかわるものとしてひと括りにされたのだと考えることはできる。しかし「ヒッピーの女の子」の話に続けて「仏文科の女子学生」の話を読むと、何か異和感を覚える。不意に異質な空間、「井戸」⁽⁹⁶⁾のような所にはまり込んだ気がする。なぜか。

前項で、『風の歌を聴け』での「東京」は、「僕」の「街」が夢幻的空間であるに比し、現実的空間として位置付けられていると、そのことはとりわけ「ヒッピーの女の子」の挿話で背景となっている「東京」に見てとれると述べておいた。

異和感は、「仏文科の女の子」の挿話が与える印象がむしろ夢幻的であることからくる。その理由はまず、「今では日が暮れると誰もその林には近づかない」というように、死霊あるいは幽霊の存在がほのめかされていることにあるが、それだけではない。

「東京」の「僕のアパート」⁽⁶⁰⁾は「目白」⁽⁵⁹⁾にある。その近辺、または東京23区内に「僕」の「通ってる」という「大学」⁽⁶⁵⁾はあるとみてよいだろう。「僕」の「専攻」は「生物学」⁽⁴⁷⁾だから、その「大学」には理系の学部があり、「仏文科」のある文系の学部もある。そして、「大学の図書館で知り合った」というのであるから、両学部は隣接しているか、互いに手近な場所

にあることになる。東京都心23区内にある大学の数は多いが、以上の条件を充たす「大学」となれば限られてくる¹⁹⁾。

いずれにしても、引用文中の「大学」は都心にあると推定される。しかし、「みすばらしい」、したがって見通しの利く「雑木林の中」の「死体」が「まるまる二週間風に吹かれてぶら下がっていた」といううらさびれた光景からは、いくら「春休み」中のこととはいえ、都心の大学のキャンパスを想像することは難しい。確かに、3月20日以降は、大学によっては卒業式も済んでいるし、「テニス」部の学生も多くは「帰省中」⁽⁶⁵⁾ということもありえて、それから「新学期が始まるまで」の「二週間」は、大学のキャンパスで学生の出入りが著しく少なくなる時期ではあるのだが。

都心の「大学」という印象を受けないのには、この挿話の中に、「東京」あるいはそれに関係する地名や東京を連想させるディテールがまったくなくとも与っている。

『風の歌を聴け』には、「僕」が「東京」で知り合った三人の女性のことが語られているが、そのうち「ヒッピーの女の子」は「地下鉄の新宿駅」・「目白」を、「僕」の「妻」は「東京」・「日比谷公園」⁽¹¹⁷⁾を背景に登場する。しかし残る「仏文科の女の子」が登場する舞台の背景には、先の引用箇所においてはもちろん、その他の箇所^(66, 74-75, 78-79, 101-102, 119)においても、地名など現実の地理的空間にかかわるディテールは一切ない。「僕の話」全体から見て、「僕」と「仏文科の女の子」の出会った場所は「東京」であると推定されるだけのことなのだ。

要するに、「仏文科の女の子」が登場するのは、「東京」という現実の地理的空間のエア・ポケットのような所、むしろ「僕」の「街」と同じ次元にある、夢幻的な場なのである。

先に述べたように、「仏文科の女の子」が「死んだ」のは1970年の3月20日前後と推定されるが、「僕」が彼女と「知り合った」時期については、

1969年とするにとどまった。

「三番目に寝た女の子」のことが語られている章の中で「僕」は、「1969年の8月15日から翌年の4月3日までの間に、僕は358回の講義に出席し、54回のセックスを行い、6921本の煙草を吸った」(75)と言っている。

なぜ起算日が「8月15日」なのだろうか。通常ならば「8月」は「夏休み」で、「僕」は「帰省中」のはずだから、「講義」の「出席」「回」数をこの月から数えるのは奇妙である。

「1969年」は大学紛争が最高潮に達した年である。そして、「大学の運営に関する臨時措置法案」が同年7月29日に衆議院本会議で、8月3日参院本会議で強行採決され、可決成立、8月17日に施行された。春から「ストライキ」や封鎖で「講義」が成り立たなかったり、はかどらなかつた大学あるいは学部も珍しくはなかつたから、「夏休み」をとりやめて「8月」に補講を行ったのだと考えられなくもない。

「僕」は「デモやストライキの話」をし、「機動隊員に叩き折られた前歯の跡」(74)もある。「僕」と同じ「大学に入った」とおぼしい「鼠」(15)も、「自分と同じくらいに他人のことも考えたし、おかげでお巡りにも殴られた」(90)と言っている。しかし、ふたりとも活動家であった形跡はない。とすれば、彼らの「大学」も例外ではなく、大なり小なり「ストライキ」の影響をこうむっていたとしてよいだろう。そして、9月以降、多くのいわゆる紛争校は機動隊の導入による封鎖解除、授業再開への道をたどる。それを容易にしたのが8月17日に施行された大学臨時措置法なのであるから、「僕」の「大学」に夏のさ中、補講があつたにしろなかつたにしろ、「8月」中旬に「講義」の起算日を定めることは、少なくとも大学の正常化を決定付けた時点を象徴的に示すという意味はあるかもしれない。しかし、それではなぜ「8月15日」ではなく、「8月17日」としなかつたのか、疑問が残る。

先に算定したような「僕」の1日当たりの喫煙量からすれば、「8月15日」から煙草を吸い始めたとも思われず、その日から「煙草」の「本」数を

数えることに意味があるとは考えられない。

残るのは「セックス」の「回」数である。「二人目の相手」であった「ヒッピーの女の子」⁽⁵⁹⁾との関係は1968年の秋の「一週間ばかり」⁽⁶⁰⁾で終わっていたから、「54回のセックス」の相手は「僕が三番目に寝た女の子」、すなわち「仏文科の女の子」以外にありえない。上に推測したような、「僕」と「仏文科の女の子」のいた「大学」が置かれていた状況からすると、補講の有無にかかわらず、「僕」も「帰省」をとりやめて、ふたりが「東京」で会っていたとしてもおかしくはあるまい。

「仏文科の女の子」は1970年の「春休み」に「死んだ」とき、「僕」と同年の「21」歳であった。その前年にふたりは「大学の図書館で知り合った」のだが、そのとき彼女は「仏文科の女子学生」であった、つまり学部に進んだ後であったのだから、彼らが互いを知ったのは1969年の4月以降ということになる。

ふたりの「セックス」の回数を「8月15日」から数えることに意味があるとすれば、それが彼らが「知り合った」か、初めて「寝た」日であるという以外にはないだろう。そうだとすると、算出期間を「翌年の4月3日まで」と限ったことにも納得がゆく。「僕」が「彼女の死を知らされた」のは、おそらくその翌日であったので、「8月15日」から「4月3日までの間」が彼らの交際期間、あるいは肉体関係のあった期間となり、その間の「セックス」の回数がすべて合わせて「54回」になるということなのである。

それでもなお疑問は残る。先の「講義」のことも併せて考えれば、起算日は「8月17日」でもよかつたのではないかと。

なぜ「8月15日」なのかと考えて、まず思いつくのは、この日が終戦記念日であることだ。しかし、それは前後の文脈とはなんのかわりもないし、テキストの意味内容にいささかの^{うらぼん}変化もふくらみももたらさない。

次に思い浮かぶのは、^{うらぼん}盂蘭盆の日にあたることだ。盂蘭盆は、「七月（または八月）一五日に祖先の霊をまつり、冥福を祈る行事」であり、「梵語

ullambana の音訳」で、「さかさにつるされるような非常な苦しみ」を意味し、「本来、死者が受けているこのような苦しみを救おうとする仏事」である²⁰⁾。これは前後の文脈と意味ある関連をもちうると思われる。というのも、同じ章に限っても、その「約8カ月」後に「僕」は「彼女の死を知らされた」(72-73)と語られているからである。また他の章では、「彼女」は「首を吊って死んだ」うえ、「まるまる二週間風に吹かれてぶら下がっていた」(60)と言われてもいるからである。

第34章で、「去年の秋、僕と僕のガール・フレンドは裸でベッドの中にもぐりこんでいた」とある。「去年の秋」の「10月」(101)とは、「1970年の8月」を基点にしてのことなので、1969年の秋をさす。したがって、「僕」が一緒に「裸でベッドの中に」いたという「ガール・フレンド」は「仏文科の女の子」以外にない。

彼女はこのとき「愛」・「結婚」・「子供」について「訊ね」、そのあげく「嘘つき！」と「僕」を批難する。「僕はひとつしか嘘をつかなかった」と言うが、それは「私を愛してる？」という問いに対する「もちろん」という「僕」の返答のことにちがいない。「今」の「愛」については「嘘」か本真かが問題になりうるが、「もっと先」(102)の「結婚」や「子供」については、願望を語っているにすぎないとも言えるのだから。また、「21」歳の「女子学生」が同年のボーイ・フレンドの「嘘」をなじるとすれば、「愛」のことしかないだろう。ただ、注意すべきは、「彼女」は「僕」の意思を「訊ね」ただけであって、自分自身の意思については「一言だって言わなかった」(102)ことである。

「仏文科の女の子」は「僕のペニスのことを『あなたのレーズン・デートウル〔存在理由〕』と呼んだ」(74)という。それは二重の意味でだろう。「あなた」にとっての「レーズン・デートウル」という意味と、彼女にとっての「あなたのレーズン・デートウル」という意味でだ。言いかえれば、「僕」は「僕の

ペニス」に自分の「存在」の根拠をもとめているということと、彼女にとって「僕」が「存在している」(75)のは、「僕のペニス」によってでしかないということだ。

「仏文科の女の子」のこの言葉は、「僕」との関係が「愛」に基づくものではなく、「ペニス」=性欲によるものでしかないことを示唆していよう。彼女に先立つ「ヒッピーの女の子」と「僕」との接点が、「気のないセックス」以外になかったことを思えば、そこになんの不思議もあるまい。

「僕」が「仏文科の女の子」との関係を「54回のセックス」という「数値に置き換え」ていた一方で、彼女は彼女で「僕」という「存在」を「僕のペニス」に還元していたのである。そして、「僕の吸った煙草の本数や上った階段の数や僕のペニスのサイズに対して誰ひとりとして興味など持ちはしない。そして僕は自分のレーゾン・デートウルを見失ない、ひとりぼっちになつた」(75)と「僕」が言うとき、それは「彼女の死を知らされ」るまでの「約8カ月」の間のことであるのだから、「彼女の死」以前にすでに「僕のペニス」は彼女の「興味」をひかなくなっていて、「僕」は彼女にとっての「レーゾン・デートウル」を「失な」っていたのかもしれない。

「僕」と「仏文科の女の子」の関係が以上のようなものであったとするなら、彼らが面識を得たという意味で「知り合った」のがたとえ「8月15日」以前のことであったとしても、それは問題とするに足りない。「僕」にとっても彼女にとっても意味があるのは、肉体的に「知り合った」「約8カ月間」の起点となる日、「8月15日」のほうだからである。

彼らの関係の意味ある出発点が「8月15日」、つまりお盆の中心となる日であるということは、「仏文科の女の子」が「約8カ月」後に「首を吊って死」ぬことを予告するものであるとともに、ふたりの関係が初めから「死」の影におおわれていたことを示す。あるいはさらに、お盆が「死んだ人間」を迎え送る行事であってみれば、彼女はすでに「死んだ女」(77)として「僕」

の前に現われたのでさえあるのかもしれない。「僕」は「彼女」が「14歳」のときにとった「写真」の「1963年8月」という「日付け」について、「ケネディー大統領が頭を撃ち抜かれた年だ」⁽⁷⁸⁾と言っている。彼女はこのときすでに死の刻印を帯びていたのであり、すでにつねに「若くして死んだ女」⁽⁷⁷⁾であったのかもしれない。

ここで「8」という数字が、とりわけ「8月」において、死や凶事のしるしとなっていることに気づく。そうだとすると、「1970年の8月8日に始まり、18日後、つまり同じ年の8月26日に終る」という「この話」⁽¹²⁾に吉い事の起こるわけがない。

「1970年の8月8日」は土曜日である²¹⁾。「リクエスト曲をプレゼントした女の子」⁽⁴⁶⁾が初めて登場するのは「ラジオ N.E.B」の「ポップス・テレフォン・リクエスト」の中でだが、この放送は「土曜の夜」⁽⁴¹⁾にあった。日付は示されていない。「1970年8月」の土曜日は、「8日」から「26日」までの間に、8・15・22日と3回ある。「ポップス・テレフォン・リクエスト」の放送は、「この話」の中でもう一度あって、これも日付がないが、そこでは「夏もそろそろおしまいだね」⁽¹¹²⁾と言われているので、こちらのほうは22日のことと推定される。その日からさかのぼって最初の放送の日までの間に経過したと思われる日数は「一週間」⁽⁹⁹⁾をはるかに超えている。したがって、「リクエスト曲をプレゼントした女の子」の登場は、「8月8日」のこととするほかない。

「僕」は「リクエスト曲をプレゼントした女の子」のことを「思い出し」⁽⁴⁶⁾たことで、「Tシャツ」をそれから「三日目の午後」⁽⁴⁹⁾、つまり8月11日に受けとる。その「翌日」⁽⁵⁰⁾、8月12日の「昼」⁽⁵¹⁾前に「小さなレコード店」で「小指のない女の子」⁽⁵⁰⁾に再会し、「〈カリフォルニア・ガールズ〉の入ったビーチ・ボーイズのLP」⁽⁵⁰⁾を含めて「3枚」の「レコード」⁽⁵¹⁾を買う。その夜、「ジェイズ・パー」で「レコードの包み」⁽⁵³⁾を「誕生日のプレゼント」⁽⁵⁴⁾として「鼠」に渡す。

「僕」はそれから「三日間」,「ビーチ・ボーイズのLPを貸してくれた女の子」の「電話番号を捜しつけた。」⁽⁵⁴⁾「レコードを買」えたので、「返」⁽⁴⁷⁾すためだ。「三日間」というのが、8月12日の「昼」過ぎからという可能性もないわけではないが、「鼠」に会った翌日の13日からとすると、「三日目」は8月15日で、「僕」は「リクエスト曲をプレゼントした女の子」が「春に部屋を出たつきり行く先」⁽⁵⁵⁾不明であることを知る。「行く先」が「仏文科の女の子」の「死んだ」という「雑木林の中」であるのかもしれないと、つまり彼女は「仏文科の女の子」の黄泉還りであるのかもしれないと「リクエスト曲をプレゼントした女の子」の項で述べておいた。「僕」が「僕と彼女を結ぶラインの最後の端」⁽⁵⁵⁾に立った日が8月15日という、死者を迎えるお盆の日であったということはまた、その「端」がこの世のそれであり、彼女はその向こうの闇に閉された、あの世の世界の住人であることを証すものともなろう。

欧米風の文化・生活にかかわるディテールにもつばら占められていると見える『風の歌を聴け』に、お盆のような日本の伝統的習俗が隠されていて、しかも物語の中で、上に述べたような意味と機能を担っていることに異論があるかもしれない。けれども、欧米スタイルの意匠とそこに隠された日本的心性という二重性、内向きの欧米化とも呼ぶべき構えこそ『風の歌を聴け』の特徴をなすものなのである。70年代末の登場以来、今日まで保たれつづけている村上作品の人気の秘密もまたそこにあるだろう。

さて、第34章で、「僕」が「僕のガール・フレンド」に「嘘つき！」と批難される場面が想起されたのは、その前の第33章で「小指のない女の子」が、「あなたには嘘をついていたのよ」⁽¹⁰⁰⁾と言ったからだ。つまり、「小指のない女の子」に入れ替って「仏文科の女の子」が登場しているのである。「仏文科の女の子」と「小指のない女の子」には似通ったところがある。

前者は「僕」を「嘘つき!」と批難し、後者は「僕」を「あなたって最低よ」(52)と言う。前者は「僕」を、「でも私が訊ねるまでそんなこと一言だつて言わなかったわ」(102)と責めたが、後者も「僕」に、「何故いつも訊ねられるまで何も言わないの?」(72)と言う。

「仏文科の女の子」は「天の啓示」や「天使」という言葉を「真剣に」(78-79)口にするが、それは彼女がキリスト教徒であるか、キリスト教に関心をもっていることを示していよう。他方、「小指のない女の子」も「YWCA」で「フランス語」(98)を勉強している。「C」はもちろん christian の頭文字である。

第33章で「YWCA」から「小指のない女の子」が出てくるのを「待つ間」,「僕」は「電気冷蔵庫の巨大な広告パネル」を見ながら、そのたくさんの「中身を平らげる順番をずっと考えてみた」(99)というのだが、続く第34章で、「仏文科の女の子」である「僕のガール・フレンド」は、「冷蔵庫」の中にあつた「古いパン」と「レタスとソーセージで簡単なサンドウィッチを作」(101)つてくれたのだった。

「小指のない女の子」が「出てきた」,「YWCAの薄汚れて陰気な建物」の、「雨で黒く濡れた門柱は荒野に立った2本の墓石のように見え」たという。そして、そのときの「彼女は三歳くらいは老けこんでいた。」(99) 物語の中に初めて姿を現わしたとき、彼女の「年齢は20歳より幾つか若」(27)いと言われていたのだから、このときの彼女の見かけの年齢は「21」(78)歳くらいとも言えて、「仏文科の女の子」の「死んだ」(79)ときの年齢と重なる。つまり「小指のない女の子」もまた、「仏文科の女の子」のよみがえり、黄泉から還つた者であるのかもしれないということだ。

そのように考えれば、「小指のない女の子」の、「僕が冬に街に帰」るのを待たずに「跡も残さずに消え去っていた」(118)という、煙の消えるような姿の消し方や、その降って湧いたような登場の仕方にも納得がいく。

「僕」が初めて「小指のない女の子」と出会つたのは、ジェイズ・バーの

「洗面所」であった。その「床に」彼女は「転がっていた」のである。「僕」は「店じゅうの客に君のことを知らないかって訊ねてまわった。でも誰も知らなかった。」(29) 彼女はふりの客であったのだ。

ジェイズ・バーは「狭い店」(12)で、「テーブル」(38)席もあるようだが、「カウンター」(12, 13, 19, 36, 37, 38, 53, 61, 63, 64, 76, 85, 115)が主体の店である。「僕」が「座」るのは「いつもと同じカウンターの端の席」で、そこから「店の中を見回」(36)することができる。

店の中には、この他、「ポータブル・テレビ」(37)と「ジューク・ボックス」(38, 76, 85)、そして「店の奥にある薄暗いコーナー」(75)の「ピンボール」(75, 85)があるだけだ。

「年齢は20歳より幾つか若」(27)い女性客がひとりでつく席は、「テーブル」ではなくて「カウンター」であるはずだ。実際、二度目に彼女が「僕」とこのバーで会ったとき、彼女は「カウンターに居心地悪そうに腰かけ」(61)て、「僕」を待っていたのである。

その「カウンター」の席で彼女は「僕なら死んでる」と「僕」に言われるくらい、「ずいぶん飲んだ」(32)。「僕」がそのことを知っているのは、彼女に代って「僕」が彼女の「財布の金で勘定を払」(30)ってやったからである。

別の「夜」に、同じくふりの客である「30歳ばかりの女」が、「カウンター」(36)にいる「僕のひとつ隣に座」ったときには、彼女が「便所」に入る回数を「僕」は数え、「バーテンのジェイ」も「ケツがすりぎれるんじゃないかな」(37)と言っている。

ところが問題の夜は、「洗面所」の「床」に「小指のない女の子」が「転がって」いるのを「僕」が発見するまでは、ふりの若い女性客がひとりカウンターで「ウィスキー」(28)を「がぶ飲み」(30)していることに、「僕」も「バーテンのジェイ」も、そして「店じゅうの客」の「誰も」気づいていなかったようなのだ。彼女「のことを」「誰も知らなかった」ということは、彼女がふりの客であることを示すだけでなく、「誰も」店の中に「彼女が存

在していたことさえ覚えてはいなかった」(55)という意味でもあるだろう。「空から降り」(78)たか地から湧いたかのようにして彼女は現われたのである。

その翌「朝」(26)、「裸」(34)で「寝ている女を眺め」ながら「僕」は言う。「体はよく日焼けしていたが、時間が経ったために少しくすんだ色に変わり始め、水着の形にくつきりと焼け残った部分は異様に白く、まるで腐敗しかけているように見えた」と。

「目覚め」た彼女は、「意識を失くした女の子と寝るような奴は……最低よ〔強調は原著〕と「僕」をなじり、否定する「僕」に、「何故私が裸だったの？」(34)と反問する。けれども、いま一つ彼女が問うべきで、見すごされがちなのは、「僕」もまた「裸」であったことだ。「僕は裸のままベッドの背にもたれ」、「隣に寝ている女を眺めた。」(27)つまり、「狭いベッド」(26)に「僕」は「裸」で、「裸」の「女」の「隣に」身を横たえて「眠つ」(30)ていたのである。「僕」が「何もしなかった」とは「信じられない」(34)と彼女が言うのも無理はないのだ。

この「僕」と「女の子」が「裸」で「ベッド」にいる情景は、「僕」と「仏文科の女の子」が「裸でベッドの中に」(79, 101)いたときのそれと重なる。

「腐敗しかけているように見えた」と「僕」が言うとき、その「体」に二重写しに重なって、「春休み」に「まるまる二週間風に吹かれてぶら下がっていた」という「仏文科の女子学生」の「死体」(60)が「僕」の眼に浮かんでいたにちがいない。

そうした文脈からすれば、「小指のない女の子」が物語の中で初めて登場するのが第「8」章(26)であることも、彼女が「小指」をなくしたのが「八つの時」(64)であることも、そして「僕」が彼女の「身長を測ってみた」とき、「8回指を重ね、最後に踵のあたりで親指が1本分残った。158センチというところだろう」(27)というのも偶然ではないであろう。「8」は凶兆でありえたのだし、「158」という数字には、「8月15日」(75)が隠されていると

見ることもできるのだから。

さらにまた、「小指のない女の子」が「仏文科の女の子」の黄泉還りであるのかもしれないという観点からすれば、彼女の「双子の妹」のことも再考の余地がある。「小指のない女の子」は、「双子の妹」は「何処に居る？」という「僕」の問いに対して、「三万光年くらい遠くよ」⁽⁶³⁾と答えている。もちろんこれは比喩であって、「リクエスト曲をプレゼントした女の子」の項で述べたように、心理的な距離を表わすものと理解される。しかしまた、文字通りにとることも許されよう。そのとき、「三万光年」は生きて人の到達することのできない距離、生と死を別つ隔たりを表わすものとなる。彼女の「同じ顔で、同じ知能指数で、同じサイズのブラジャーをつけて」⁽⁶⁴⁾いた「双子の妹」は、言いかえれば、彼女の分身は、死の世界「にいる」ということである。だが、生者には不可能だが、死者は「三万光年」という距離をわたってくることができる。たとえば、お盆の日に。

「小指のない女の子」は、「八つの時」に「9本しか手の指がなくなったから、もう誰も」⁽⁶⁵⁾「双子の姉妹」と「間違えなくなった」と言う。「9本」というのは、「左手」が「4本の指」⁽⁶⁴⁾になったからである。「八」は凶事にかかわりうる数であったし、「4」は同音の死を連想させるものとして、その使用が忌まれることのある数である。

つまり、死が「双子の姉妹」を別つものとなったということであり、ひとりが「死んだ女」⁽⁷⁷⁾となることで、「間違え」られ「なくなった」ということなのである。

しかしまた、この世に残った者も死のしるしを帯びている。それは彼女が、「三万光年」の彼方と相通じていることの、彼女の分身である「死んだ女」の黄泉還りであることの、しるしであるだろう。

「仏文科の女の子」は「真剣に（冗談ではなく）、私が大学に入ったのは天の啓示を受けるためよ、と言った」⁽⁷⁸⁾という。彼女は自分を聖女に見たて

ていたのであろう。

だが、第21章で「僕」は、「三人目のガール・フレンドが死んだ半月後、僕はミシュレの『魔女』を読んでいた」と言って、その「一節」を紹介している。その中に、「裁判官レミーは八百の魔女を焼いた」が、「私の正義はあまりにあまねきため、先日捕えられた十六名はひとが手をくださのを待たず、まずみずからくびれてしまったほどである」(66)とある。

もちろんここで「魔女」と言われているのは、魔女狩りとして悪名高いキリスト教の異端審問の犠牲者たちのことである。しかし「仏文科の女の子」が「首を吊って」(60)「死んだ半月後」というと、「彼女の死体」は「誰にも気づかれず、まるまる二週間風に吹かれてぶら下がっていた」(60)のだから、「僕」が「彼女の死を知らされた時」と思われる「4月3日」(75)の翌日、あるいは翌々日のことになる。

そしてまた注意すべきは、「彼女の死体」が「誰」かに「気づかれ」たとき、「僕」が「彼女の死を知らされた時」が重なりうるということである。「新学期が始まる」とすぐに「彼女の死体」は発見されるのだが、そのとき身許確認のため彼女と親しかった「僕」が立会いをもとめられたということは大いにありうることだ。「僕」が「彼女の死を知らされた」のは、そのような意味合いにおいてであったのかもしれない。もしそうなら、「僕」は「春休み」に「まるまる二週間」放置されて、「腐敗」しきった「彼女の死体」を直接目にしたことになる。たぶんそれゆえにこそ、「小指のない女の子」の「体」の色に「腐敗」を感じとったのであろう。

「彼女の死を知らされた」日であり、そのうえ「首を吊つ」た「彼女の死体」を目にしたかもしれない日に、あるいはその翌日に「僕はミシュレの『魔女』を読んでいた」のだ。そこで、「みずからくびれてしまった」という言葉を含む「一節」に魅きつけられたのは、自然なことと言えるだろう。それに、「みずからくびれ」ること自体、キリスト教徒にとっては許されない罪であり、「魔女」にふさわしい振舞いであるはずだから、「天の啓示」を待

つと言いながら「首を吊って死んだ」者もまた「魔女」の類いなのだ。つまり、「僕」は「みずからくびれてしまった」「魔女」に「首を吊って死んだ」「仏文科の女の子」の姿を心の中で重ねて「読ん」だからこそ、問題の「一節」にとらわれたのである。

しかしまた、「僕」も「仏文科の女の子」も中世のヨーロッパに生きているわけではないから、「僕」が心の中で「仏文科の女の子」と「魔女」を重ね合わせたとすれば、それはこの言葉の広義の意味、人、とりわけ男の心をとらえ、まどわす魔性の女という意味においてもあるはずだ。

さらに、「一節」を引用したあと、「僕」は付け加えて、「わたしの正義はあまりにあまねきため、というところがなんともいえず良い」(66)と言う。もちろん「僕」の指摘するとおり、ここにはブラック・ユーモアがあるのだが、「僕」の置かれていた状況を考えると、「僕」のこの感想には鋭いユーモア感覚以上のものを感じざるをえない。もし「僕」の心の中で、「魔女」と「仏文科の女の子」が重ね合わされていたとするなら、「裁判官レミー」である「わたし」と「僕」もまたパラレルに置かれていたのではないかと。つまり、「正義」の立場にある「僕」は、自身では「手をくだす」ことなく、「魔女」としての「仏文科の女の子」を「みずからくびれ」る立場に追いやってしまったのではないかということだ。

「僕」の「誕生日」は「12月24日」で、「なんとなく損な星まわりらしいな。イエス・キリストと同じだ」(105)と言っている。イエスを裏切ったユダは「首をつって死んだ」²²⁾のだった。「仏文科の女の子」はなんらかの意味で「僕」に裏切り行為をしたのだろうか。あるいはその逆に、「僕」が彼女を裏切り、自殺に追いこんだのか。

いずれにしろ、「仏文科の女の子」が「首を吊って死んだ」ことに対する「僕」のこだわりには謎めいたところがある。

「僕」は「彼女の死を知らされた時」(75)の心境については一言も言っていない。そして、その死の理由についても、「何故彼女が死んだのかは誰にも

わからない。彼女自身にわかっていたのかどうかさえ怪しいものだ」(79)として、自殺にはつきものとも言える噂や、推測・臆測の類いの一切を語ろうとしていない。それは死あるいは死者への慎みからではないであろう。「ガール・フレンドが死んだ」と知った日、またはその次の日くらいに読んだ『魔女』の「一節」について、「わたしの正義はあまりにあまねぎため、というところがなんともいえず良い」という感想を述べる「僕」には、それはふさわしくない。

おそらく「僕」は「仏文科の女の子」の自殺にかかわる何事かを隠しているのだ。同時に、その自殺に根差す「僕」の罪の意識をも。

「僕」が第21章で『魔女』の「一節」を思い起こしたのは、直接には、その前の第20章で、「僕」が「小指のない女の子」に語った、「大佐はその豹も含めて8年間に125匹の豹と虎を撃ち殺した」(65)という逸話からの連想と理解できる。

しかし、この第21章をはさむ第20章と第22章は「僕」と「小指のない女の子」との二つのデートにあてられている。そうした物語の構成に、「仏文科の女の子」と「小指のない女の子」が重なり合う存在であることが暗示されていると言えるだろう。第22章で「小指のない女の子」が「地獄」(68)のことを口にするのは、おそらく偶然ではないのである。

(この項終り)

[注]

- 1) 『風の歌を聴け』は雑誌『群像』1979年6月号に、第23回群像新人文賞受賞作品として掲載された。次いで、これに手を加えたものが、同年7月に講談社から、「一九七九年五月〔傍点は鈴木、以下同じ〕の日付入りの「ハートフィールド、再び……(あとがきにかえて)」を附して、単行本として出版され、この単行本版と同一のものが、1982年に講談社文庫に取められた。そして、1990年に刊行された「村上春樹全作品 1979~1989 ①」〔以下「全作品①」と略記〕に収録されたが、そこでは、本文に変更はないが、「ハートフィールド再び……(あとがきに

かえて)」は削除されている。

したがって、『風の歌を聴け』のテキストには、現在までのところ、雑誌掲載稿、単行本版および文庫本版、そして全作品版の3種類があることになる。

上掲「全作品①」の附録冊子の中で、作者である村上春樹自身は、このテキストの異同に関して次のように言っている。デビュー作の『風の歌を聴け』は、第二作の『1973年のピンボール』（1980年発表）とともに、「まだ習作の域を出ない作品だとは思いますが、まったくの無心で書かれている。それがこの作品のよさでもあるし、問題点でもある」（「自作を語る」台所のテーブルから生まれた小説、IVページ）と、そして「〔全作品〕に収録するにあたって〔……〕この2作品にはまったく筆を入れなかった。〔……〕あえて入れたくないという気持の方が強かった。〔……〕これが僕だったのだし、結局のところどこまでもいつでもこれが僕なのだ」（同冊子、VIIIページ）と。

「まったく筆を入れなかった」というのは、厳密に言えば、単行本版および文庫本版の本文については、という限定が必要であろう。先に見たように、初出稿が単行本化されるにあたっては本文に若干の変更が加えられており、本稿の本文において指摘するように、この加筆訂正のもつ意味は、見方によっては、決して小さいものとは言えない。また、「ハートフィールド、再び……（あとがきにかえて）」の有無も作品への変更と考えることもできる。「5月」という初出稿の発表時期に先立つ日付と、虚構の作中人物である「ハートフィールド」を本文におけると同様にあたかも実在の人物であるかのように扱っていることから、この「あとがきにかえて」を作品の一部と見ることも可能であろうから。

本稿が分析の対象とするのは「全作品」版の『風の歌を聴け』である。それが最も新しい版であるからで、最良の版という判断からではない。最良の版とは、誤字・脱字・乱丁等のないものであるとともに、他の版と比較してより文学的価値の高いものであると言えよう。後者の意味では、「全作品」版を最良の版とするのはためらわれるのである。

作者の言う「無心」ということの意味は深いが、いまは文字どおりに受けとるとして、「まったくの無心で書かれている」という言葉が最も適切なのは、むしろ初出稿についてであろう。「この作品のよさ」も「問題点」も初出稿においてこそよりストレートに見えてくるはずなのだ。「これが僕だった」のだし、「これが僕なのだ」という言葉が最もふさわしいのも初出稿についてこそであるだろう。

- 2) 数字をはさんだ()は、それに先立つ文・語句が「全作品①」版の『風の歌を聴け』からの引用であることを、また()内の数字は同版のページ数を示す。
- 3) 「カリフォルニア・ガールズ」の第1番の英語原詞は次のとおりである。

Well East Coast girls are hip
I really dig those styles they wear

And the Southern girls with the way they talk
They knock me out when I'm down there

The midwest farmer's daughters
Really make you feel alright

And the Northern girls with the way they kiss
They keep their boyfriends warm at night

I wish they all could be California girls [下線は鈴木]

(The Beach Boys: *Good Vibrations*, TOCP.50135, (p)1997,
MFD. BY TOSHIBA EMI LTD. に付された冊子, p.11)

歌詞の翻訳であるから意識であってさしつかえないのだが、上の英語原詞と村上訳を対照すると、見すごし難い相違点、あるいはずれが一箇所ある。

それは、村上訳では 'the way they kiss' と、'at night' の部分が省略されていることだ。「北部のかわいい女の子／君をうっとり暖めてくれる」と村上がさらりと訳している所は、原詞により忠実であろうとするなら、たとえば、「北部の女は口づけしようとせず／夜は体を温めてくれるのさ」（前掲書、Kini Takeuchi 訳）と訳される。両訳を比べると、原詞のもっていたリアルで性的なニュアンスが、村上訳ではぬぐい去られている、あるいは少なくとも、かなり稀薄になっていることがわかる。次の「初めてデートした女の子」の項で検討する、プレスリーのナンバー「心をとどかぬラヴ・レター」の村上訳についても言えることだが、こうした原詞とのくい違い、あるいはずれは偶然のものではあるまい。この箇所の村上訳の意図あるいは動機については本稿の本文で明らかになっていくと思うので、ここでは指摘にとどめておく。

- 4) 「全作品①」の巻末の断り書きに、「カリフォルニア・ガールズ」の著作権取得は1965年とある。また、『ロック・ザ・ディスコグラフィー'98年版』（シンコー・ミュージック、1997年刊）のBeach Boysの項を見ると、「カリフォルニア・ガールズ」の名が最初に現われるアルバムは「サマー・デイズ」〔*Summer Days (And Summer Nights!!)*〕、1965年7月発売）で、「僕」に「リクエスト曲をプレゼントした女の子」が「貸してくれた」(55)という「カリフォルニア・ガールズ」のに入った

ビーチ・ボーイズのLP」(50)は、これのことであろう。次いで、「*Best of The Beach Boys, vol.2*」[1967年発売]に再録されているようだが、前掲書にはこのアルバムの収録曲名の一覧はない。そして「ビーチ・ボーイズ・イン・コンサート」[*The Beach Boys In concert*, 1973年11月発売]、「終わりなき夏」[*Endless Summer*, 1974年発売]に続けて再録されるが、その後に出された「ビーチ・ボーイズ・ラヴ・ユー」[*The Beach Boys Love you*, 1977年4月発売]、「M.I.U.アルバム」[*M.I.U. Album*, 1978年9月発売]、「L.A. (ライト・アルバム)」[*L.A. (Light Album)*, 1979年3月発売]という三つのアルバムには「カリフォルニア・ガールズ」の名はない。

- 5) 小西慶太『村上春樹の音楽図鑑』(ジャパン・ミックス, 1998年刊, 12ページ)
- 6) 双葉十三郎『西洋シネマ大系 ぼくの採点表Ⅱ 1960年代』(トパーズプレス, 1988年刊, 110ページ)
- 7) 「ものさし」という語の出てくるハートフィールドの著書の刊行年は「1936年」(9)とされているが、これは1963年の下二桁をひっくり返したものだだろう。この推定は、これだけでは単なる思いつきにすぎないと見えようが、後述するように、『*風の歌を聴け*』では、この種の数字の置き換えによる遊びは珍しくないのである。
- 8) 「全作品④」巻末の断り書き参照, また, 小西, 前掲書, 12ページ。
- 9) 'She'd [*sic*] wrote upon it. Return to sender. Address unknown, no such number, no such zone.' (『エルヴィス・プレスリー ベスト第2集』, シンコー・ミュージック, 1998年刊, 62-63ページ)
- 10) 「山の手」とあるだけで、「僕」の「街」の、とはっきり書かれているわけではない。しかし、他の箇所でも「僕は鼠を誘って山の手にあるホテルのプールに出かけた」(88)とあり、「山の手」という語は限定なしに、それだけで「僕」の「街」の「山の手」を指すものとして使われていると考えることができる。
- 11) 注4)参照。
- 12) 『群像』1979年6月号, 50ページ。
- 13) 同誌, 64ページ。
- 14) 1975年の刊行物にある数字だが、芦屋市の人口は70,922人、神戸市のそれは、1,283,178人とある(『コンサイス地名辞典—日本編』1975年刊, 37ページ, 469ページ)。
- 15) 『群像』1979年7月号, 「創作合評」, 344ページ。ただし、別の評者が「東京へ夜行バスで行くんですね。だから、湘南地方ではあり得ない」(同ページ)と直ちに異論を呈している。また、「何か神戸あたりのような感じもするけど、しかし、神戸に巡洋艦が入ってくるはずはない」(同誌, 343ページ)とも述べられている。第31章に、「港に巡洋艦が入ると、街中MPと水兵だらけになってね」(89)とある。

- 16) 加藤典洋「夏の十九日間——『風の歌を聴け』の読解」、『国文学』1995年3月号、學燈社、36—49ページ。
- 17) 吉本ばなな『キッチン』(1987年)、福武書店、1988年、5—70ページ。ただし、『満月——キッチン2』では「東京」の名は三度出てくるうえ(同書、106、122、163ページ)、「東京駅のKIOSK」(同書、122ページ)、「地下鉄」(同書、129ページ)など実在の東京の具体的なディテールが散見される。『キッチン』と『満月』はストーリーには連続性があるが、文体という観点からすれば、「キッチン2」と題されてはいるが、別物と言わなければならない。
- 18) 『昭和史全記録』、毎日新聞社、1989年刊、797ページ。
- 19) 「僕」と「仏文科の女子学生」が「知り合った」(60)のは、1969年と推定される。それから10年後の資料ではあるが、『全日本大学大鑑 1979年度版』(日本学術通信社、1979年刊、270—271ページ)によると、所在地が東京都内で、フランス文学科のある文学部と、理系の学部をもつ私立大学は、早稲田大学・立教大学・上智大学・学習院大学・青山学院大学の5校であるが、いずれも生物学科はない。ただ、早稲田大学の教育学部の理学科には、数学・地学と並んで生物学〔専攻課程?〕がある。それに、同大の文学部と教育学部は、校舎は別だが、同じ新宿区内にあつて背中合わせの距離にあるし、「僕のアパート」(61)のあつた「目白」(60)にも近い。「僕」の「専攻」は「生物学」(47)だが、理系の学部の学生であるとは言っていない。以上のことを考え併せると、「僕」の「大学」のモデルとして早稲田大学の名を挙げることは可能であろう。

その他、東京都内に所在する国公立の大学では、東京大学が文学部にフランス文学科を、理学部に生物学科をもつ。両学部の所在地は同じ文京区本郷であるが、「僕のアパート」のある「目白」からは遠い。

また、東京都立大学には生物学科のある理学部と、文学科のある人文学部があるが、両学部は所在地が目黒区と世田谷区に別れ、理学部は「目白」からはかなり遠い。(同書166ページ)
- 20) 『学研国語大辞典』、学習研究社、1980年刊、172ページ。
- 21) 加藤、前掲論文、43ページ。
- 22) 『新約聖書 共同訳』、日本聖書協会、1978年刊、106ページ。